斜里町文化財調査報告ＸＸＸⅦ

チャシコツ岬上遺跡

発掘調査報告書

2014.3
斜里町教育委員会

例　　言

1．本書は、北海道斜里郡斜里町ウトロ西地先国有林（網走南部森林管理署　1377林班は小班）に所在するチャシコツ岬上遺跡（登載番号：Ⅰ－08－21）の発掘調査報告書である。

2．調査は、平成25年度文化財補助事業（国宝重要文化財等保存整備費補助金）に係る町内遺跡学術発掘調査（保存目的のための内容確認調査）である。

3．調査期間、面積ならびに調査体制は以下の通りである。

発掘調査期間　平成25年９月３日～平成25年９月17日（現場作業）
　　平成25年11月26日～平成26年３月28日（整理作業）
調査面積　　20㎡
調査体制
　調査主体者　斜里町教育委員会　　教 育 長　村田　良介
　担　当　者　斜里町立知床博物館　　学芸主幹　松田　　功
　調　査　員　斜里町立知床博物館　　学 芸 員　平河内　毅
　　〃　　臨時職員　髙橋　鵬成・大西　凜（慶応義塾大学大学院生）
発掘現場作業員
　牧野睦美、元木哲之。
整理作業員
　近藤富士子、佐藤美由樹、丹治八千代、西塚玲子、野口京子、牧野睦美、元木哲之。

4．本書の執筆は調査員各自が分担した。文末に執筆者名を明記しているが、最終の執筆責任は松田にある。現場作業における図面作成並びに、整理作業における第2図版作成は、平河内、髙橋、大西らが作業にあたった。図版作りのための遺物の実測、拓本並びにトレースは整理作業員の各々が担当した。現場での写真撮影は、調査員が中心となり作業にあたり、報告書用の遺物写真撮影に関しては松田と整理作業員の元木、牧野があたった。

5．動物遺体鑑定については、調査員の髙橋・大西が鑑定し、本書のまとめに成果を報告した。

6．石器の石質については、当館学芸員の合地信生氏に肉眼鑑定をしていただいた。

7．発掘調査区、層位、遺構平面及び断面、遺物平面・断面分布、遺物実測及び拓本図にはそれぞれスケールを入れ縮尺比を示した。遺物写真図版の縮尺については、遺物実測及び拓本図の縮尺に合わせた。

8．遺跡位置図には、国土地理院発行の１／25,000地形図、ウトロ（ＮＬ－55－36－4－2）の一部を使用した。また、遺構などの図面に付している方位は全て磁北である。

9．石器の説明文章中に記載しているアルファベット略号は、石器の石質を示しており、以下の通りである。
OB：黒曜石、AND：安山岩、HS：硬質頁岩、CH：チャート（硅岩）、AG：メノウ、MS：泥岩、SS：砂岩。

10．出土遺物の保管・管理は、斜里町教育委員会（斜里町埋蔵文化財センター）で行う。

11．発掘調査及び本書作成にあたり、以下の方々、機関のご協力、ご指導、ご助言を賜りました。ここに氏名を記し、感謝申し上げます（順不同、敬称略）。
水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課）、長沼　孝・田中哲郎・藤原秀樹・村本周三（北海道教育庁生涯学習推進局・文化財・博物館課）、北海道森林管理局網走南部森林管理署、熊木俊朗・国木田　大（東京大学）、佐藤孝雄（慶応義塾大学）、右代啓視・鈴木琢也（北海道開拓記念館）、武田　修（北見市教育委員会）、天方博章（羅臼町郷土資料館）、小野哲也・椙田光明（標津町ポー川歴史民俗資料館）、高嶋　優（奈良教育大学学生）、森本　拓（立正大学学生）。

目　　次

例　言 …… Ⅰ
第１章　調査の概要 …… 1
第２章　各調査区内の遺構及び遺構外出土の遺物… 6
まとめにかえて ……24
報告書抄録 ……26

図　版　目　次

第１図　チャシコツ岬上遺跡位置図 …… 2
第２図　地形測量図及びグリッド配置図 …… 3
第３図　トレンチ1･2･3層位図 …… 4
第４図　トレンチ1　平面図及び遺物平面・垂直分布図 …… 6
第５図　トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）及び遺物平面・垂直分布図 …… 8
第６図　トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）焼土範囲・覆土出土土器 …… 9
第７図　トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）覆土出土石器 …… 9
第８図　トレンチ1　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層）出土土器（1） ……10
第９図　トレンチ1　遺構外（Ⅱ層）出土土器（2） ……11
第10図　トレンチ1　遺構外（Ⅱ層）出土石器・鉄製品 ……11
第11図　トレンチ1　遺構外（Ⅰ層・表土）出土土器 ……12
第12図　トレンチ1　遺構外（Ⅰ層・表土）出土石器 ……13
第13図　トレンチ2　平面図及びレキ集中図 ……14
第14図　トレンチ2　遺物平面・垂直分布図 ……15
第15図　トレンチ2　遺構外（Ⅲ層）出土土器 ……16
第16図　トレンチ2　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器 ……16
第17図　トレンチ2　遺構外（Ⅱ層）出土土器 ……16
第18図　トレンチ2　遺構外（Ⅰ層）出土土器 ……17
第19図　トレンチ2　遺構外（表土）出土土器 ……18
第20図　トレンチ2　遺構外（Ⅱ層・Ⅰ層・表土）出土骨製品 ……18
第21図　トレンチ3　平面図及び遺物平面・垂直分布図 ……19
第22図　トレンチ3　遺構外(Ⅲ層上部)出土土器 …21
第23図　トレンチ3　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器 ……21
第24図　トレンチ3　遺構外（Ⅱ層）出土土器 ……22
第25図　トレンチ3　遺構外（Ⅰ層・表土）出土土器 ……23
第26図　トレンチ3　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・表土）出土骨製品 ……23

表１　動物遺体出土量 ……25
図１　焼骨・非焼骨出土量 ……25

写真図版目次

PL.1
遺跡遠景（カメ岩）
測量作業風景（1）
測量作業風景（2）
トレンチ1　土器出土状況
トレンチ1　土層セクション
PL.2
トレンチ1　完掘状況
トレンチ1　埋戻し後の状況
トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）　掘削前状況
トレンチ1　Ⅰ層土器出土状況
トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）　掘削状況
トレンチ1　Ⅱ層土器出土状況
トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）　完掘状況
トレンチ1　作業風景
PL.3
トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）　焼土範囲・覆土出土土器
トレンチ1　ＰＩＴ1（土坑）　覆土出土石器
PL.4
トレンチ1　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層）　出土土器（1）
PL.5
トレンチ1　遺構外（Ⅱ層）　出土土器（2）
トレンチ1　遺構外（Ⅱ層）　出土石器・鉄製品
PL.6
トレンチ1　遺構外（Ⅰ層・表土）　出土土器
PL.7
トレンチ1　遺構外（Ⅰ層・表土）　出土石器
発掘風景　集合写真
PL.8
トレンチ2　掘削前状況
トレンチ2　完掘状況

トレンチ2　表土　レキ集中出土状況
トレンチ2　レキ集中出土状況　NW →
トレンチ2　レキ集中出土状況　E →
トレンチ2　石器出土状況
トレンチ2　骨出土状況
トレンチ2　作業風景
PL.9
トレンチ2　遺構外（Ⅲ層）　出土土器
トレンチ2　遺構外（Ⅱ層）　出土土器
トレンチ2　遺構外（Ⅰ層）　出土土器
PL.10
トレンチ2　遺構外（表土）　出土土器
トレンチ2　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）　出土石器
PL.11
トレンチ3　掘削前状況
トレンチ3　完掘状況
トレンチ3　レキ集中出土状況
トレンチ3　石器出土状況
トレンチ3　土器出土状況
トレンチ3　作業風景（1）
トレンチ3　作業風景（2）
トレンチ3　学芸員実習
PL.12
トレンチ3　遺構外（Ⅲ層上部）　出土土器
トレンチ3　遺構外（Ⅰ層・表土）　出土土器
PL.13
トレンチ3　遺構外（Ⅱ層）　出土土器
PL.14
トレンチ3　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）　出土石器
作業風景
PL.15
トレンチ2　遺構外（Ⅱ層・Ⅰ層・表土）　出土骨製品
トレンチ3　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・表土）　出土骨製品

第１章　調査の概要

発掘調査の経緯

ウトロ市街地周辺及び、ウトロから斜里市街地に向かう海岸沿いには、海に突き出た岬状の特異な地形が見られる。ウトロ市街にはオロンコ岩や三角岩を含むウトロ崎があり、ウトロ市街から斜里市街地に向け順にチャシコツ崎、弁財崎、オシンコシン崎がある。これら海に突き出た崎のうち、オロンコ岩とチャシコツ崎、弁財崎にはアイヌ文化期のチャシ址があり、チャシコツ崎にはオホーツク文化期を主とした集落跡が残されている。道内各地、その中でも道北及び道東地域を中心としてオホーツク文化期の集落群は数多くあるが、標高50mを超える高さの、それも海に突き出た断崖状地形（海岸段丘）に、30棟ものオホーツク文化期のほぼ単一集落跡が見られるのは当遺跡以外にはない。

このような特異な地形の中で形成された集落群の成因が、いかなるものによるのかを調査するべく、国庫補助金を活用した学術調査を実施することとなった。

今年度は、集落内の平坦地に３列のトレンチを掘り、住居以外の遺構の有無を確認する目的で掘削を実施した。結果的には、土坑と配石遺構、炭化物や焼土を含む土層の存在を確認するに留まり、この調査の目的である集落の成因に関わる直接的な情報は得ることができなかった。

立　地

チャシコツ岬上遺跡（Ⅰ-08-21）は、北緯44°04′00″、東経144°58′40″、ウトロ市街地の南西方向、海に突き出たチャシコツ崎の中位海岸段丘頂部の平坦地上に位置し、おおよそ6,000㎡の面積を有する（図１）。地表から見た限り、この平坦地には30棟の竪穴住居跡があり、ほぼオホーツク文化期の単一集落と推察する。遺跡の周囲には、低位の段丘面のほか、中位段丘面から崩落した段丘崖斜面が観察できる。中位段丘面の主体は、温泉・ホテル街があるウトロ香川地域に広く分布し、標高は50～100mで山地へ向かって高度を増している。面の広がりは扇形を成し、主体は亜角から亜円の大から巨礫の不淘汰な土石流堆積物より構成されている。台地崖は主に新第三系の堆積岩（泥岩主体）・火山砂礫岩・水中火砕岩・岩脈などで構成される。崖斜面の傾斜は40°を越えた急角度を成しており、崩壊や小地滑りなどが発生し易い地形である。また、崖を構成する堆積層は珪化変質・粘土化した新第三系火山性砕屑岩ブロックから成り、これらが海浜成砂礫層と不規則な関係で接触しているのが観察される。

当遺跡は今回の発掘以前に調査された実績はないが、昭和24年に河野広道氏らがボーリング（試掘か）調査を行い、土器（オホーツクと縄文中期）片と石器の採集記録を残している。

遺跡周辺にはチャシコツ岬下A・B遺跡、ウトロチャシ、ウトロ西1遺跡があり、ウトロ市街地方面ではウトロ遺跡やウトロ滝上遺跡、ペレケチャシなど縄文から続縄文文化、さらにはオホーツク文化、トビニタイ文化、擦文文化、アイヌ文化を包含している遺跡が見られる。

発掘調査区設定

調査区は四等三角点を基準点（原点）とし、この基準点と遺跡中央部にあたる任意の点を結んだ線上をＡラインとし、調査区域を確定させた（第２図）。調査区は東西方向をアルファベット順（h ～ a・Ａ～ M）、南北方向をアラビア数字順（1～20）とし、１区画を5m×5m（25㎡）に設定した。発掘調査したトレンチ1～3は竪穴住居跡に被らず影響の最も少ないと判断した区域に設定した。

層　位

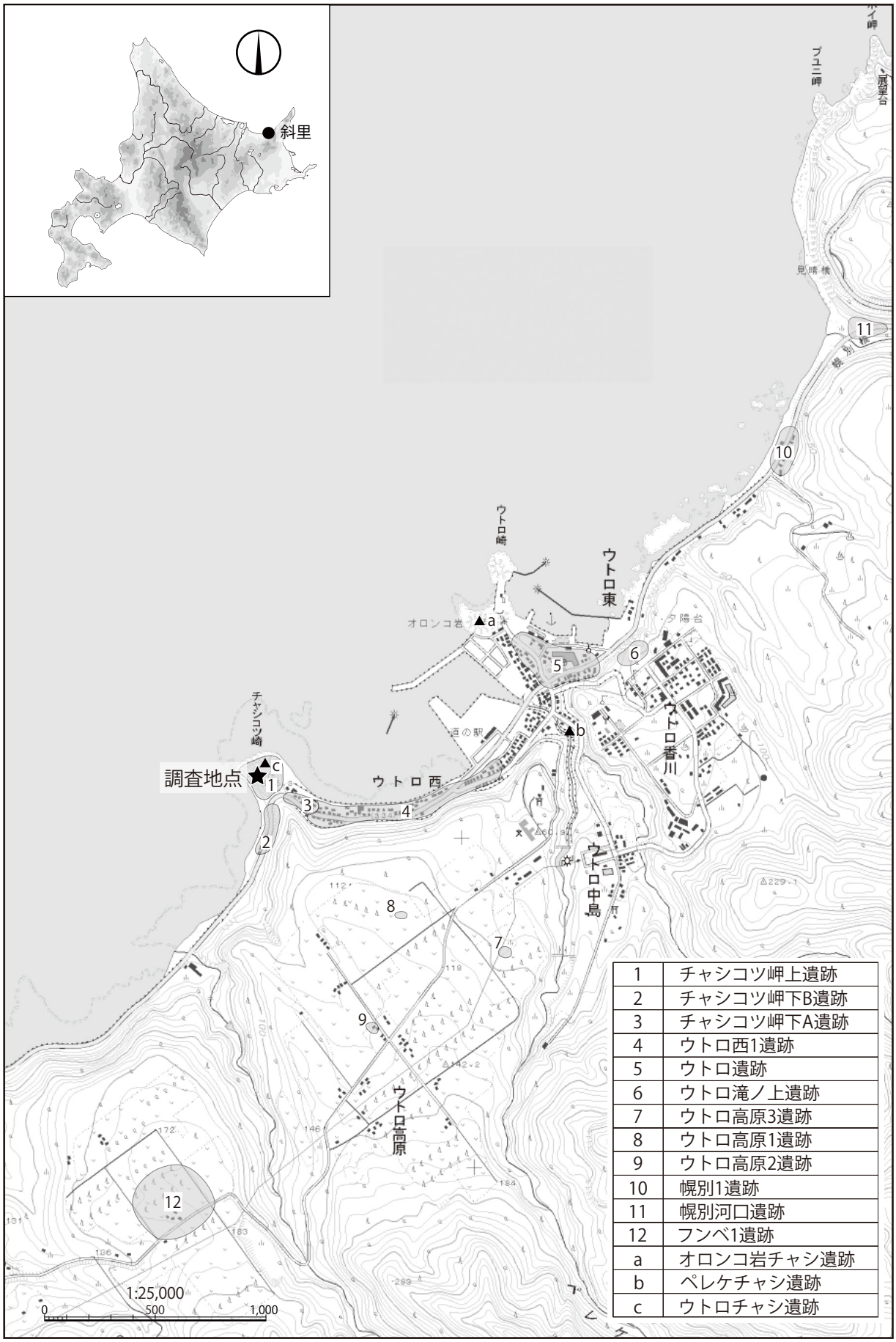
調査区内の堆積層はⅠ～Ⅳ層までを確認した（第３図）。主な遺物包含層はⅠ～Ⅲ層で、Ⅳ層まで確認したトレンチ2では、Ⅳ層上面からも遺物が出土した。肉眼でテフラ確認はできなかったが、遺跡に隣接したチャシコツ岬下B遺跡の調査では竪穴住居跡内からTa-a（樽前山a火山灰）とＭａ-ｂ５（摩周岳b5降下軽石）が確認されていることから、当遺跡の竪穴住居跡内にもテフラが残されている可能性がある。以下、基本層位と遺物文化層について解説する。

Ⅰ層　表土の腐植土層を含む黒色土層。縄文中期から現代の遺物までを含む。層厚2～25cm。

Ⅱ層　基本の土色は黒褐色土層。中に焼土や炭化物、灰などの層を挟在する区域もある。主としてオホーツク文化期の遺構・遺物を包含する。層厚2～30cm。

Ⅲ層　黄灰ないし黄褐色土層。締まりのある層。主としてオホーツク文化期と縄文中期の遺物を包含する。今回の調査ではⅢ層上面を確認するに留めたため、遺物の主たる構成時期は断定できない。トレンチ2での確認層厚30cm。

Ⅳ層　黄灰ないし灰褐色土層。剣先スコップでも掘削が困難な締まりある土層。トレンチ2の深掘区域のみで確認した。

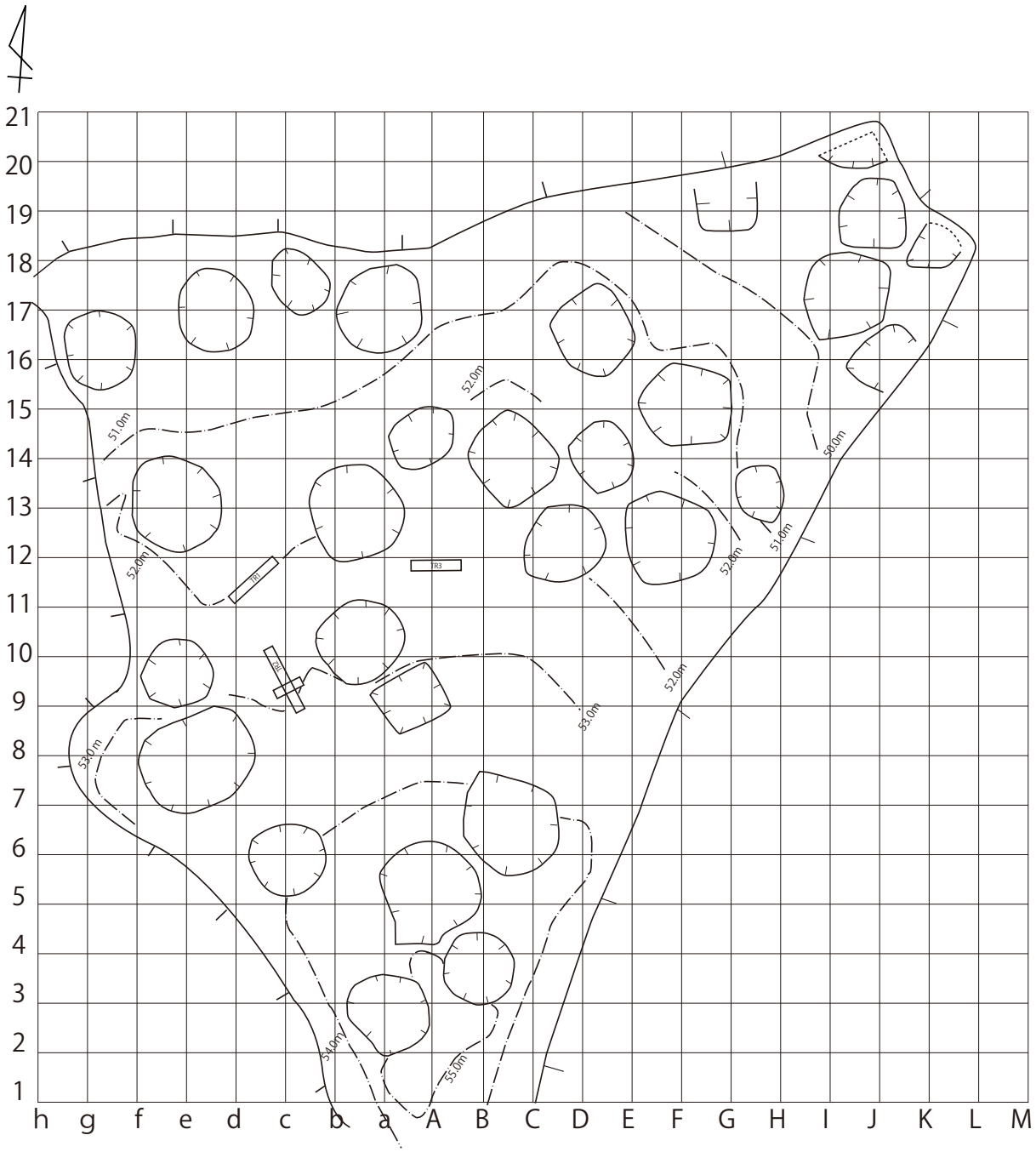


1	チャシコツ岬上遺跡
2	チャシコツ岬下B遺跡
3	チャシコツ岬下A遺跡
4	ウトロ西1遺跡
5	ウトロ遺跡
6	ウトロ滝ノ上遺跡
7	ウトロ高原3遺跡
8	ウトロ高原1遺跡
9	ウトロ高原2遺跡
10	幌別1遺跡
11	幌別河口遺跡
12	フンベ1遺跡
a	オロンコ岩チャシ遺跡
b	ペレケチャシ遺跡
c	ウトロチャシ遺跡

第１図　チャシコツ岬上遺跡位置図

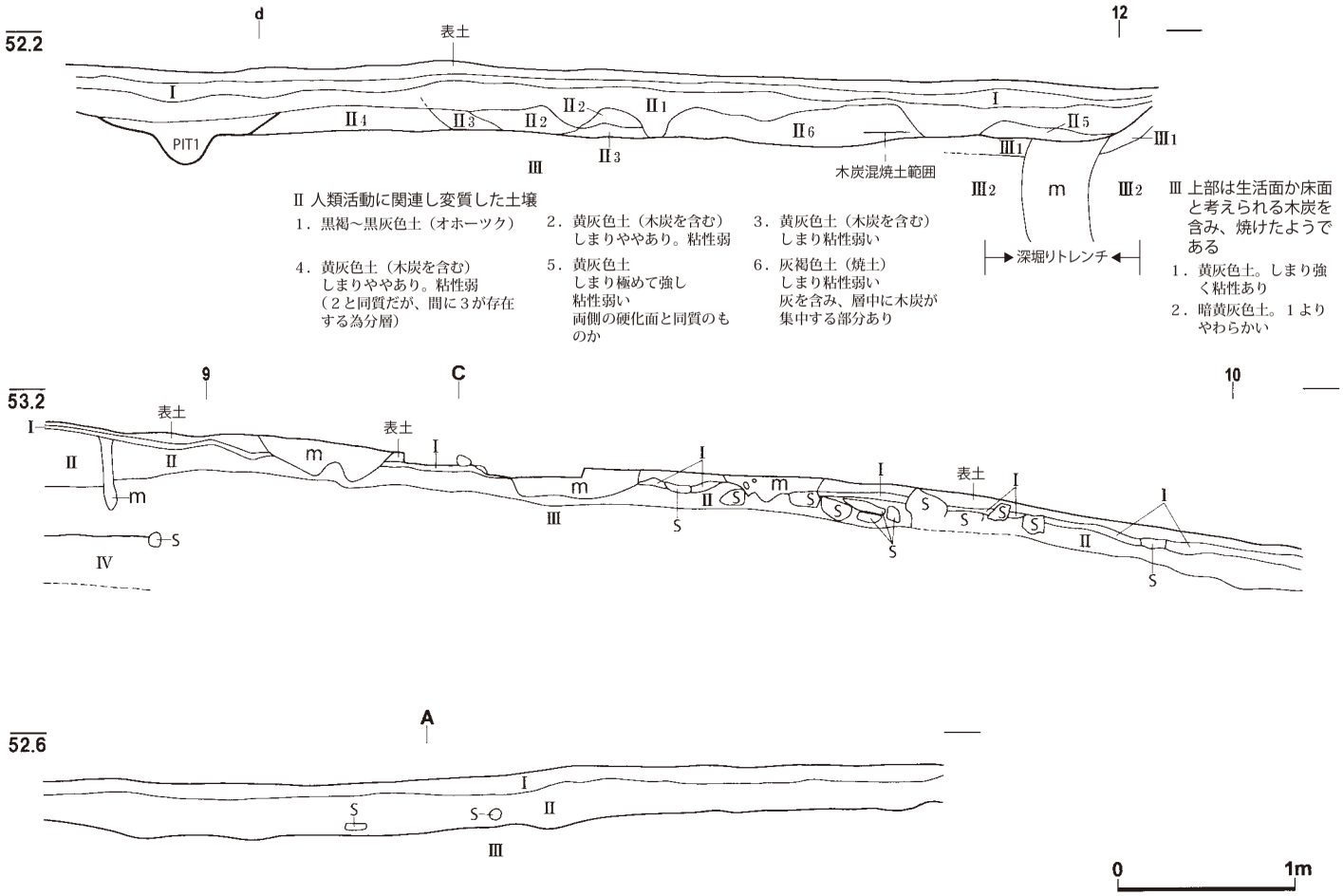
遺構の概略

トレンチ1からは、土坑1基と炭化物と焼土、灰を含む土層の広がりが確認された（第4・5図）。トレンチ2のⅠ～Ⅱ層中からは、淘汰された平らな大～巨礫の広がりが確認された（第13図）。



第２図　地形測量図及びグリッド配置図

0　10m



第３図　トレンチ１・２・３層位図

遺物の概略（第4･14･21図）

出土遺物の内訳および件数は、土器686件、石器391件、レキ28件、鉄製品他160件の合計1,265件であった。しかしながら、これは件数であって、実際には現場で１点１点取り上げするのには時間がかかることから、まとめて取り上げたものも含んでの件数となっている。

出土した遺物の時期を見ると、縄文中期のトコロ６類土器のほか、オホーツク文化（貼付文）期の土器群が多数を占めている。一方、石器では縄文期、オホーツク文化期を通じ剥片石器が多く出土していた。使用石材は黒曜石が最も多く、安山岩や硬質頁岩、メノウ等も僅かに確認されている。

遺物の分類

当遺跡からは土器、石器、石製装飾品、金属及び骨製品、自然遺物が出土している。以下、分類した。

（１）土器

Ⅰ群　縄文時代中期に属するものである。トコロ６類土器と考えられる。

Ⅱ群　オホーツク文化期に属するものである。主なものは貼付文土器でソーメン状と擬縄のものが見られた。僅かだが、刻文土器も出土している。この他、時期の特定が不可能な土器片もいくつか見られた。

（２）石器

Ⅰ群 石　鏃

ａ類：有茎石鏃、ｂ類：無茎石鏃、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅱ群 石　銛 最大長が3～5.5cm、最大厚が4～６㎜、重量が１～5ｇに相当するもの。

ａ類：有茎石銛、ｂ類：無茎石銛

Ⅲ群 石　槍

ａ類：有茎石槍、ｂ類：無茎石槍、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅳ群 石　錐

ａ類：棒状、ｂ類：つまみ部有するもの、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅴ群　削　器

ａ類：ナイフ、ｂ類：つまみ付きナイフ、ｃ類：安山岩製ナイフ

Ⅵ群 掻　器 刃部加工形態から分類した。

ａ類：ラウンドタイプ、ｂ類：サイドタイプ、ｃ類：エンドタイプ、ｄ類：ミックスタイプ

Ⅶ群 彫　器

剥片の一部に彫刀面打撃によって作られた打面をもつ

Ⅷ群　剥片、砕片

ａ類：リタッチド・フレイク（加工痕がある）、ｂ類：ユーティライズド・フレイク（使用痕がある）

Ⅸ群 石核・原石

ａ類：プラット・フォーム明確、ｂ類：プラット・フォーム不明確、ｃ類：棒状原石

Ⅹ群 石　斧

ａ類：打ち欠きや敲打により整形されているもの、ｂ類：磨かれて整形されているもの

ⅩⅠ群 たたき石

ａ類：棒状レキが素材、ｂ類：扁平レキが素材、ｃ類：円レキが素材

ⅩⅡ群 すり石

ａ類：棒状レキが素材、ｂ類：扁平レキが素材、ｃ類：円レキが素材

ⅩⅢ群 砥　石

ａ類：研磨面が有溝のもの、ｂ類：研磨面が１ヵ所のもの、ｃ類：研磨面が複数あるもの

（３） 石製装飾品（石器を除く）

（４） 金属製品

（５） 骨製品（骨角器）

（６） 自然遺物　加工が認められない遺物で、レキ、動物遺体、炭化植物遺体、焼土粒、ベンガラ等が出土した。

第２章　各調査区内の遺構及び遺構外出土の遺物

トレンチ１

e11グリッドからd11にかけて1×5mのトレンチを設定した（第2・4図）。調査の経過に伴い、東側の南壁隅に硬化した面が確認されたため、その性質を確認するためトレンチに沿って北東へ1×1m拡張した。拡張部分北隅では土層確認のために深堀トレンチを0.3×1mで設定した。拡張後周辺を精査したところ、硬化した面の周囲からは灰混じりの焼土、木炭を含む焼土部分が検出されたが、詳しい性格は不明である。トレンチ1内では遺構としてＰＩＴ1（土坑）がトレンチ西側の北壁直下に検出された。

層　位

トレンチ1では第Ⅰ層からⅢ層までを確認した（第3図）。主な遺物包含層はⅠ・Ⅱ層であり、Ⅱ層中には焼土等の人類活動に伴うと考えられる変質した土壌が見受けられる。Ⅲ層はその上部が生活面であったと考えられる層位であり、一部深堀トレンチで堆積状況を確認した。以下基本層位と文化層位について解説する。

Ⅰ層　しまりの弱い黒褐色土層。なお、森林性の腐植土からなり植物の根により攪乱が著しい上部2～6cmを表土とした。オホーツク文化期の遺物を包含する。層厚2～12cm

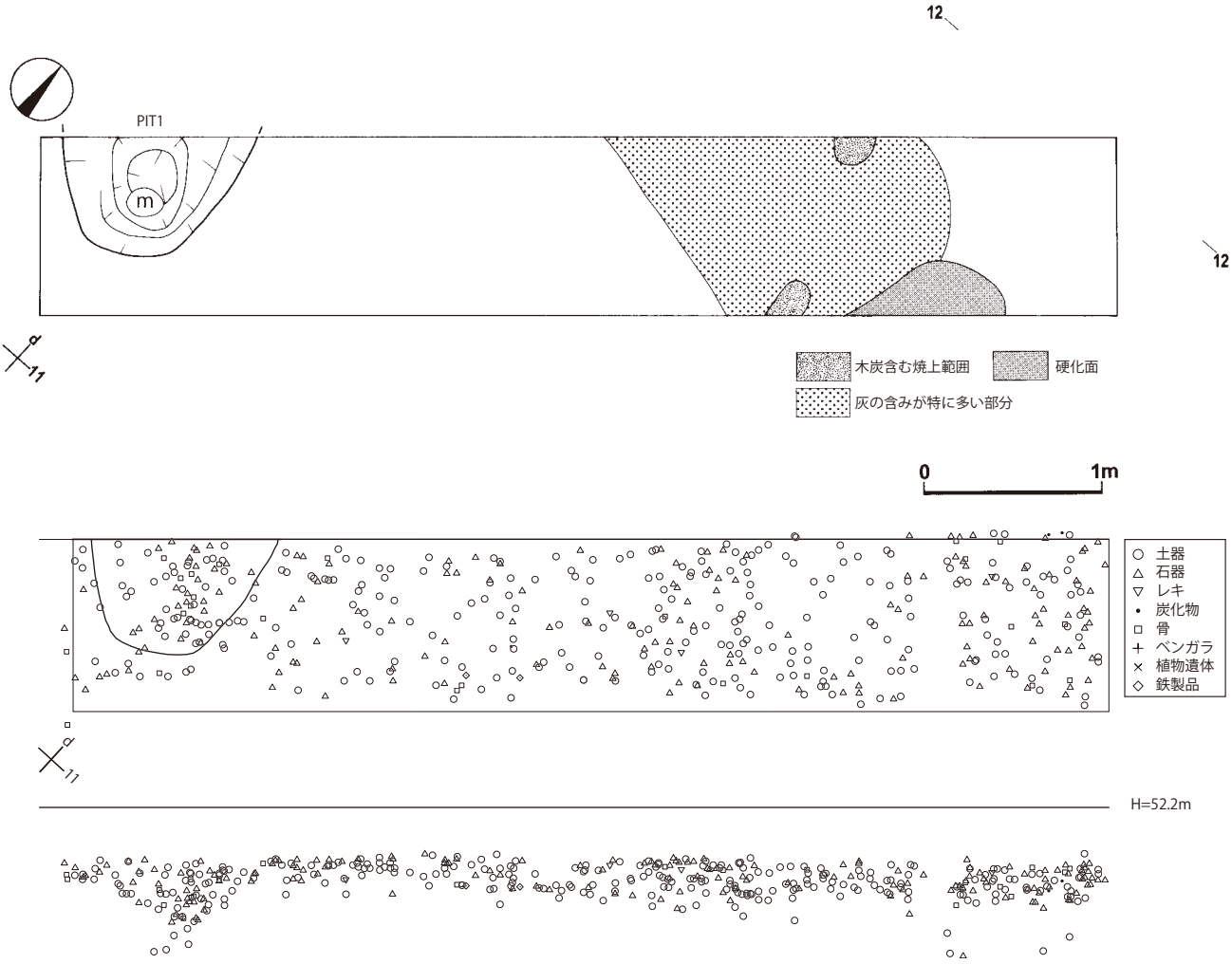
Ⅱ層　灰褐色・黄灰色および黒褐色土層。オホーツク文化期の遺物・遺構を包含する。人類活動に伴うと考えられる土壌であり、焼土や灰の多く混じる部分、硬化した面、何らかの排土を含むと考えられる。堆積状況や土色から1～6までに分層した。層厚2～24cm

１層　黒褐色～黒灰色土　しまり弱い。オホーツク文化期の遺物を含む。

２層　木炭を含む黄灰色土　しまりをやや持ち、排土と考えられる。

３層　木炭を含む黄灰色土　しまり弱く、排土と考えられる。

４層　木炭を含む黄灰色土　2と基本的に同質だが堆積状況によって分層した。



第４図　トレンチ１　平面図及び遺物平面・垂直分布図

５層　黄灰色土　しまりきわめて強く、トレンチ東側で確認された硬化した面と対応すると考えられる。
６層　灰褐色土　しまり・粘性が弱く、灰を含む。一部に薄く木炭と焼土が集中する箇所がみられる。
Ⅲ層　しまりの強い黄褐色土。木炭を含む上部とその下位層に分層される。
１層　木炭を含む黄褐色土　しまり強く粘性有。オホーツク文化の生活面と考えられる。遺物は極めて少ない。8cm。
２層　暗黄褐色土　Ⅲ1層と比して、しまり弱く木炭を含まない。無遺物層。層厚60cm以上

遺物分布図

平面分布図（第4図）によると、トレンチ全体に遺物が分布する一方で、ＰＩＴ1に集中することも見てとれる。垂直分布図を見ると、Ⅰ層とⅡ層とを分け隔てる僅かながらの分布の差異が観察できる。この観察結果より、遺物はⅡ層からの出土が多いことがわかる。また、Ⅲ層面の傾斜が西側から東側に向け緩やかに深くなるのに合わせて遺物分布も傾斜するようすが窺える。種別による分布の差異は見てとれない。

遺　構

前述のとおり、トレンチ1内では土坑1基のほか3箇所の遺構と考えられる箇所が検出された（第4図）。木炭と焼土の集中部分と土が硬化した面はⅡ層中に確認され、オホーツク文化期の人類活動によるものであると考えられる。これら3箇所は検出範囲がごく限られており、明確に伴う遺物も検出されなかったため、性格を特定できなかった。以下では検出された遺構の内、遺物が伴ったＰＩＴ1（土坑）について述べる。

ＰＩＴ1（土坑）

トレンチ1の西側、北壁直下でオホーツク文化期の遺物を包含するⅡ層中に礫が検出されたため、その周囲を精査したところ、褐色土の広がりが見られたため、土坑と認定した。周囲の堆積と見分けがつきにくかったため、上部平面を作図し、トレンチ壁面に接するように30cmのサブトレンチを任意の長さで設け、土坑の中心に先のサブトレンチに直行するように30cmのサブトレンチを設け、堆積状況を確認しながら掘削した。

遺　構（第5図）

形態　平面形―全体の掘削には至らなかったが、不整楕円形であると推測される。底部は不整円形である。規模―掘削部分の最大径1.08m（北東―南西方向）底部直径30cm（北東―南西方向）。掘り込み形態―深さ15cm程までは緩やかに掘り込まれ、テラス状になった後底部まで掘り込まれている。底部は比較的平らであり、最深部の深さは35cm。

層位　覆土は4つに分層できる。上部には褐色土が堆積し、乗っている礫との接点には焼土、灰が確認された。下には暗褐色土が堆積し、底部には黒褐色土が堆積している。一部柔らかい黄褐色土が確認され、本来の堆積ではなく、根による攪乱であると考えられる。構築層―壁がⅡ4層を切っているため、Ⅱ層中の構築であると考えられる。

遺物分布図（第5図）

平面分布図―テラス状部分よりも内側に分布する。垂直分布図―主に1・2層に分布し、3層からは土器のみが検出されている

遺　物（第6･7図）

土器　第6図1はⅡ群の底部付近破片である。2はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼り付け文は細い粘土紐による直線文と波線文である。3はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様は刺突による列点文である。4はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は細い粘土紐による直線文と波線文である。5・6・8はⅡ群胴部破片である。貼付文は細い粘土紐による直線文と波線文である。7はⅡ群胴部破片である。外面に炭化物が付着している。9～25はⅡ群胴部破片である。

石器　第7図1はⅠ群b類である。OB（黒曜石）製である。以下、黒曜石製のものは記載しない。2はⅡ群ないしはⅢ群c類である。3はⅤ群a類である。刃部は欠損しているが微細な調整がみられることからⅤ群とした。AG製である。4～10はⅧ群ｂ類である。4はHS製、8はHS製である。11はⅩⅡ群a類と考えられるが石鑿の可能性もある。AND製である。

小　括

一部がトレンチ外に伸びていたため、全体像が不明な土坑である。層位関係・遺物からオホーツク文化期ソーメン状貼付文土器群に属する土坑である。形態・遺物からその性格を推し量ることはできなかった。

遺構外出土遺物

遺構外出土遺物についてはⅢ層からⅠ層へと古い時期順に、また土器、石器、金属器の順で説明する。動物遺体については「まとめにかえて」の項で全トレンチをまとめて後述する。遺物の分類基準は第1章遺跡の概要・遺物の分類の項を参照していただきたい。石器の石質の記述については、例言の記載を参照されたい。

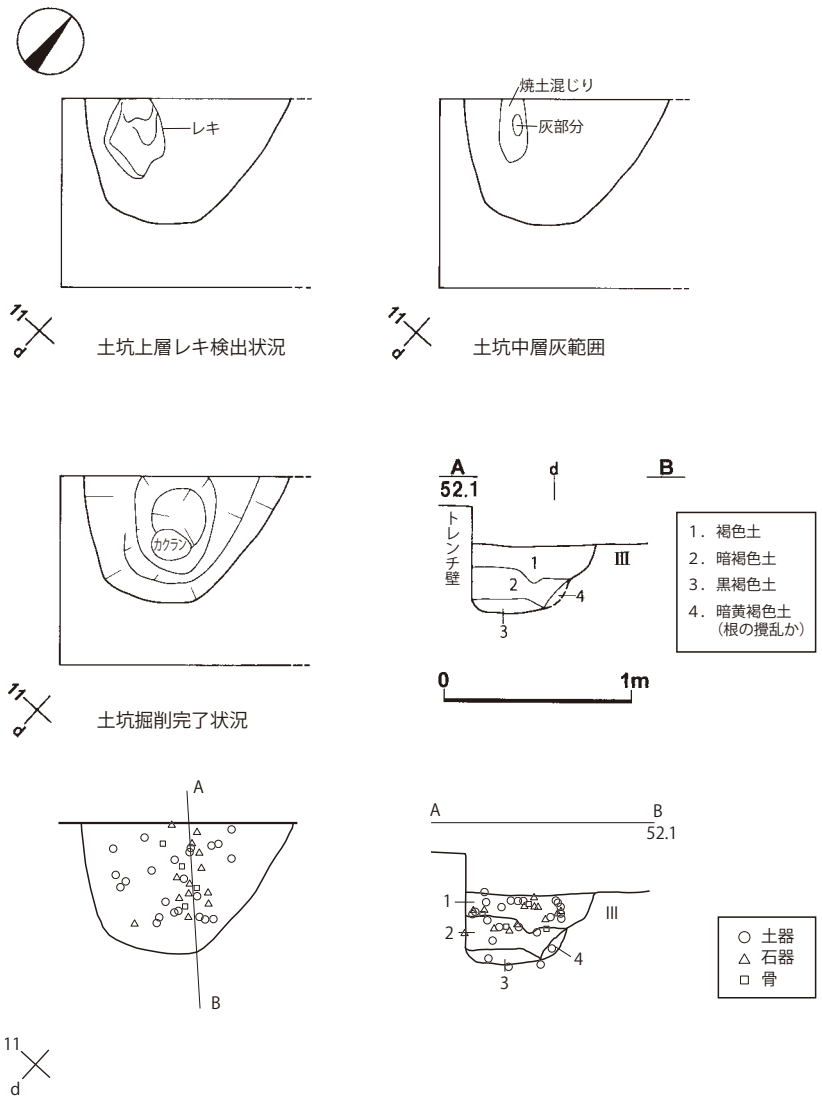
Ⅲ層（第8図）

土器　第8図1はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は細い粘土紐による波線文である。内外面に炭化物が付着している。

石器　Ⅲ層から石器は出土していない。

Ⅱ層（第8～10図）

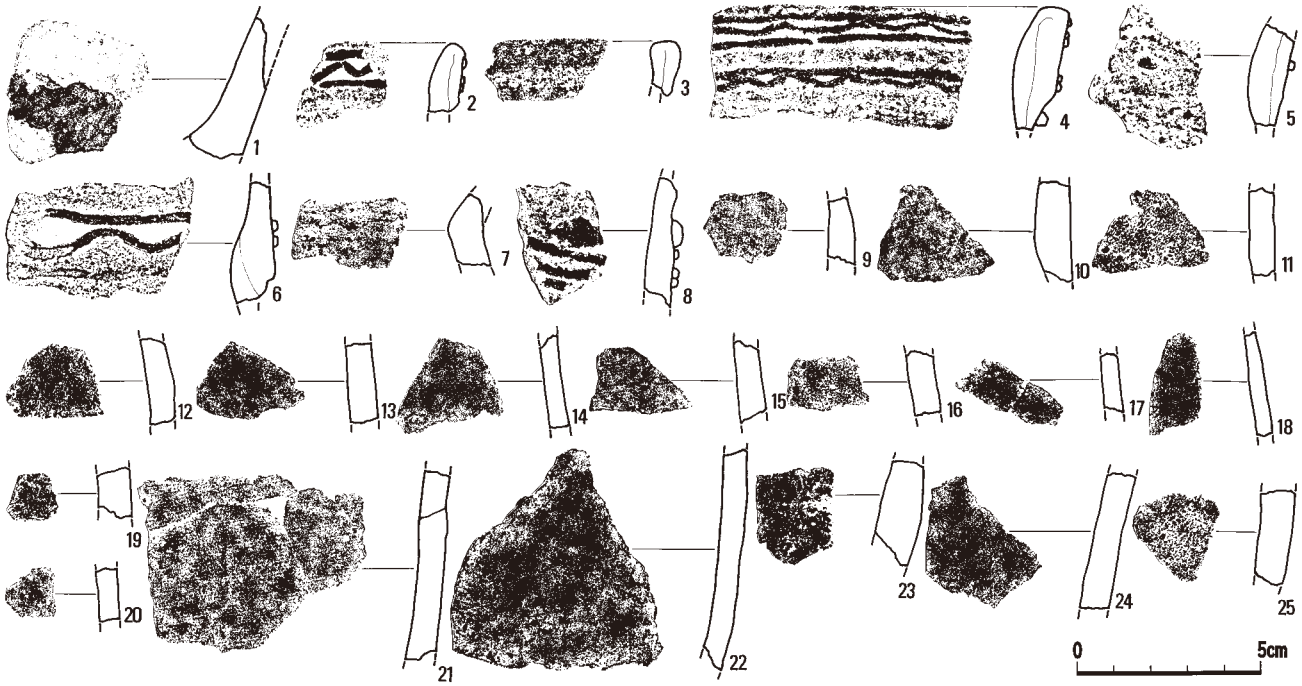
土器　第8図2はⅠ群の胴部破片である。3は所属の特定ができない胴部破片である。文様・調整を順に解説すると、横ケズリ、3本の横走並行沈線、沈線をナデで調整、胴部に荒い縦ミガキが施されている。内面は横方向の指ナデで調整されている。焼成は良好である。調整の見られることから、続縄文期初頭や擦文期の可能性もある。4はⅡ群の壷形土器である。口縁部から胴部と底部とは接合しないが、同一個体と判断した。サイズは口径―17cm、胴径（最大径）―21.5cm、底径―10cm、器高―20.5cm、器壁厚―7～12mm、胎土は砂レキを含む、焼成は良好。色調―内外面ともに黒～灰褐色。形態―口唇部：断面形はやや丸みを持つ。口縁部：粘土の折り返しが観察できる。口縁肥厚部に2段の細い粘土紐による貼付文があり、上部は直線文に挟まれた波線文、下部は擬縄貼付文である。頸部を持たない。胴部：上部に細い粘土紐による擬縄貼付文を1条持つ。底部：平底。整形・調整：内外面ともに器面調整がなされている。5・6はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。内面に炭化物が付着している。7はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の押捺文は肥厚部の下部に弱い押捺を連続して施文している。8はⅡ群の頸部破片である。文様の貼付文は円形状貼付文と、細い粘土紐による直線文と波線文である。内面に炭化物が付着している。9～11、13～21はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は細い粘土紐による直線文と波線文である。9は吊手のような装飾が欠損した可能性がある。9・10、16～18は折り返し口縁である。19の口唇部には沈線がみられる。9・10・13・15～17・20の内面には炭化物が付着している。12はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は口唇部付近と頸部に直線文が、その間に上部の直線文から垂下するように逆L字状の文様が細い粘土紐でつけられている。内面に炭化物が付着している。22～29はⅡ群胴部破片である。文様は貼付文である。22は突起状貼り付けと細い粘土紐による直線文と波線文、擬縄文から構成されている。24は細い粘土紐による直線文である。25は吊手状の突起を持つ。内外面に炭化物が付着している。26は円形貼付文と細い粘土紐による直線文である。23・27～29は細い粘土紐による直線文と波線文である。30はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は細い粘土紐による擬縄文である。31～35はⅡ群胴部破片である。31・35は細い粘土紐による直線文である。32～34は細い粘土紐による直線文と波線文である。33は内面に炭化物が付着している。



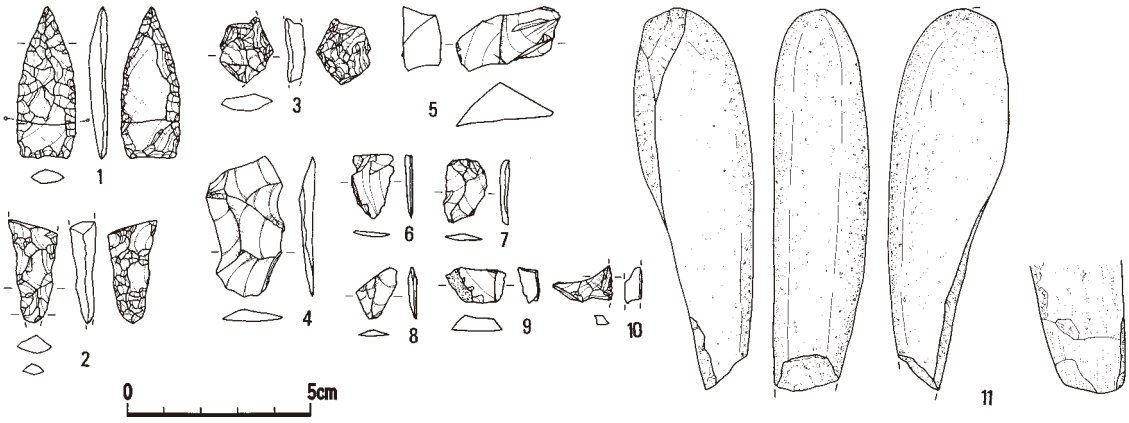
第５図　ＰＩＴ１（土坑）及び遺物平面・垂直分布図

第9図1～9はⅡ群の底部である。1は底径―7.5cm、器壁厚―5mmである。2は底径―3.5cm、器壁厚―4mmである。3の内面には横方向に入念なナデと一部にミガキがみられる。外面の上部は縦ナデの後、横ミガキ。底部付近は横ナデ、横ミガキがなされている。3・4の内面には炭化物が付着している。

石器　第10図1はⅠ群a類である。2はⅤ群a類である。3はⅥ群ｄ類である。4～7はⅧ群a類である。6・7はb類



第６図　トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）焼土範囲・覆土出土土器



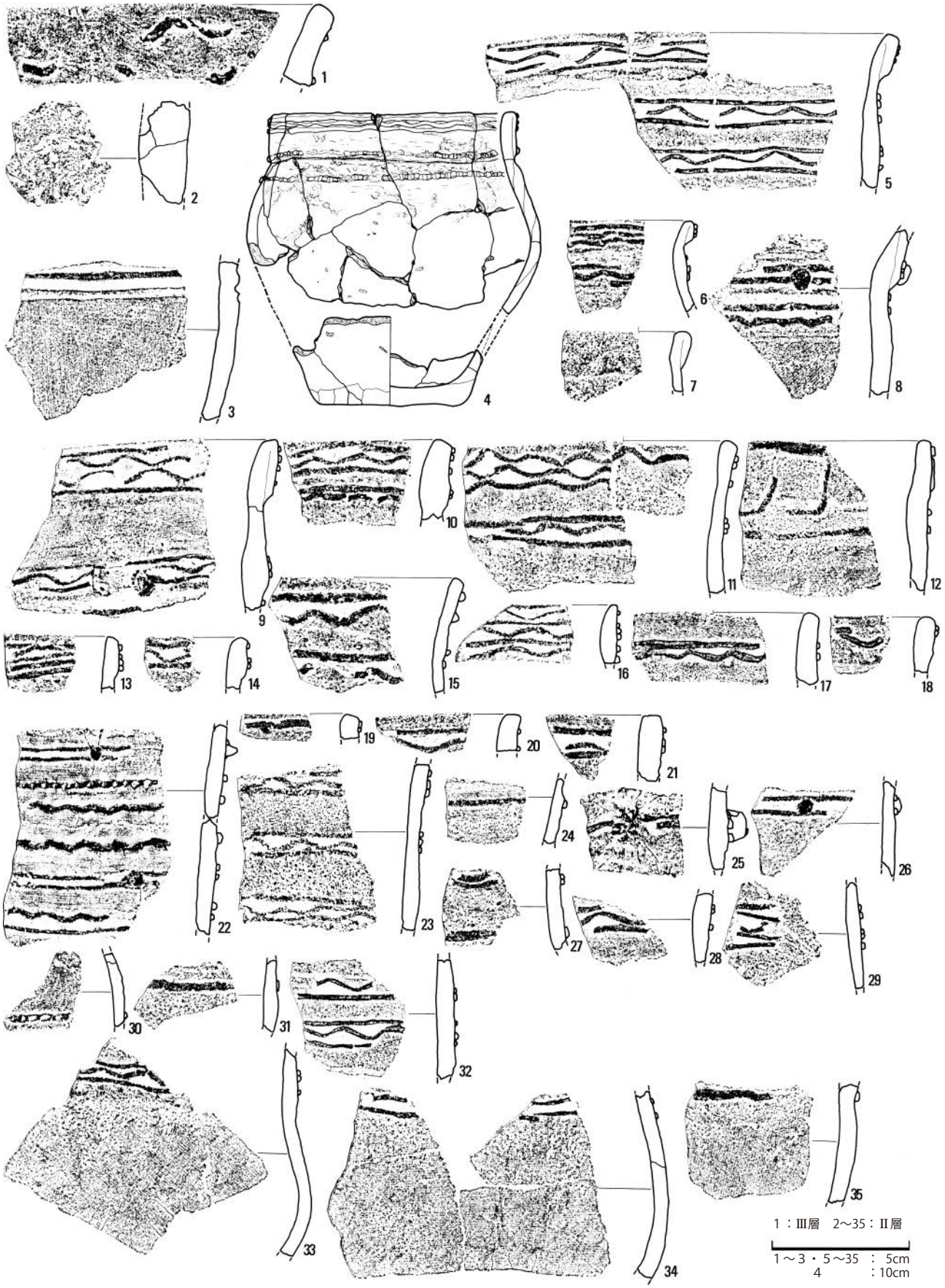
第７図　トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）覆土出土石器

の可能性もある。8はⅫ群b類である。AND製で、強く被熱している。

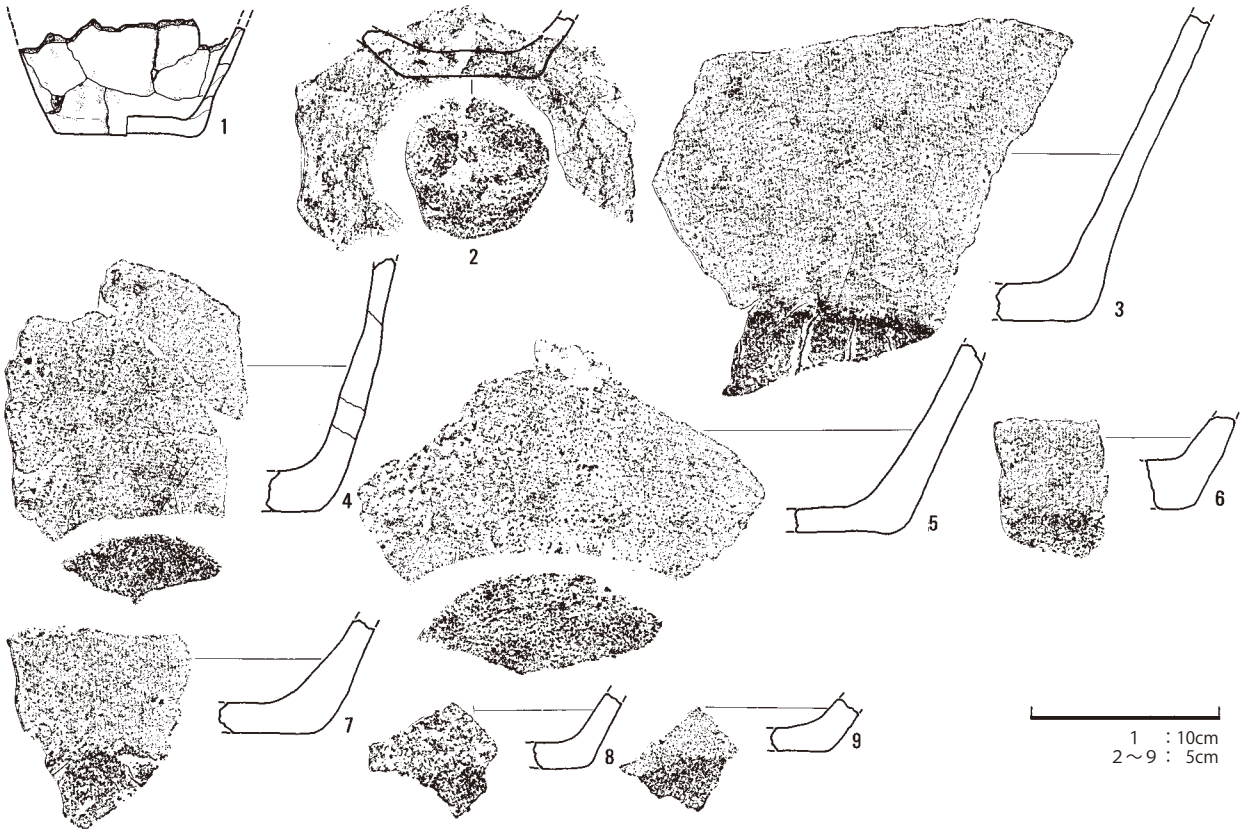
鉄製品　第10図9・10は刀子の可能性がある鉄製品。9には柄の木質が一部残存している可能性がある。10は先端部に近いと考えられる。両者は接合しないが、近接して出土しており同一個体の可能性はぬぐいきれない。

Ⅰ層・表土（第11・12図）

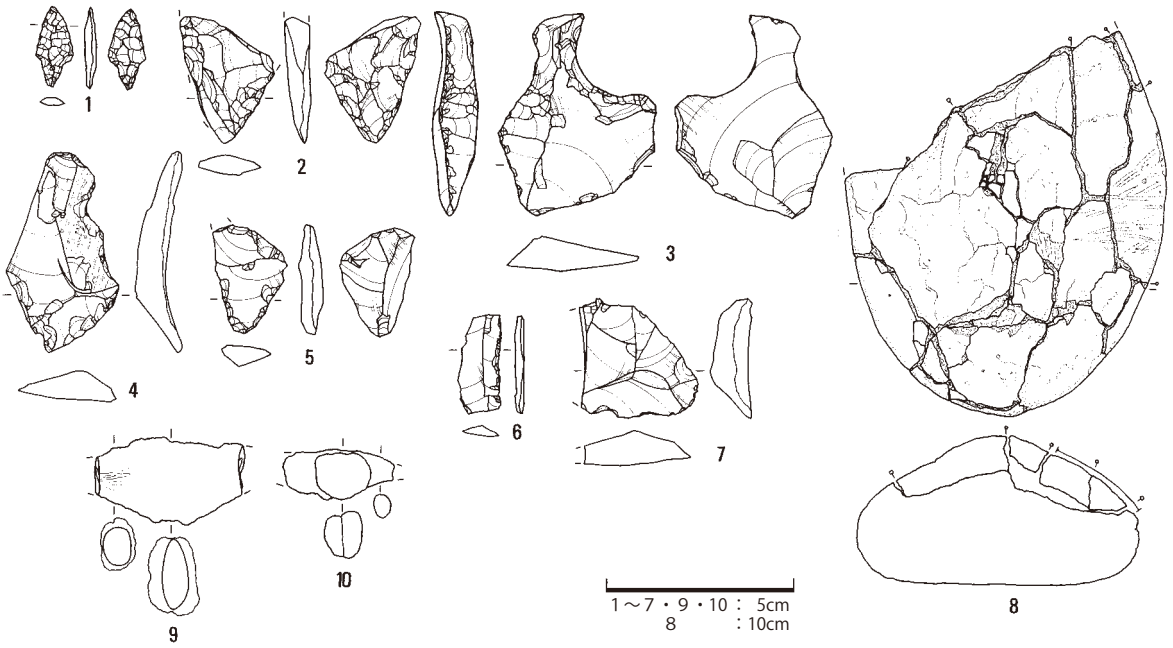
土器　第11図1～9はⅡ群口縁部破片である。文様は貼付文である。1の口縁部は折り返し口縁である。口縁部の貼付文は細い粘土紐による直線文に挟まれた波線文が2段である。口縁部と頚部の境に沿うように付された細い粘土紐が、口縁部下段の貼付文から頚部にかけての短い貼付を囲んでいる。口縁部右断面付近に補修孔が1つある。2～6・8は細い粘土紐による直線文と波線文である。2・3・5の口縁部は折り返し口縁である。3・4の内面には炭化物が付着している。7の内面に炭化物が付着している。9は円形状貼付文と、細い粘土紐による直線文と波線文である。10・11はⅡ群口縁部破片である。文様は無文である。12～21はⅡ群胴部破片である。12・13・19は細い粘土紐による直線文である。内面に炭化物が付着している。14～16・18・20・21は細い粘土紐による直線文と波線文である。16と20には内面に炭化物が付着している。17は細い粘土紐が横に密接した直線文である。22～24はⅡ群の底部である。文様は無文である。以上がⅠ層出土資料である。25～27はⅡ群口縁部破片である。25・26は折り返し口縁である。25は円形貼付文と細い粘土紐による直線文、波線文である。26・27は細い粘土紐による直線文と波線文である。28～30はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は細い粘土紐による直線文、波線文である。31はⅡ群の底部である。以上が表土出土資料である。



第８図　トレンチ１　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層）出土土器（１）



第９図　トレンチ１　遺構外（Ⅱ層）出土土器（２）



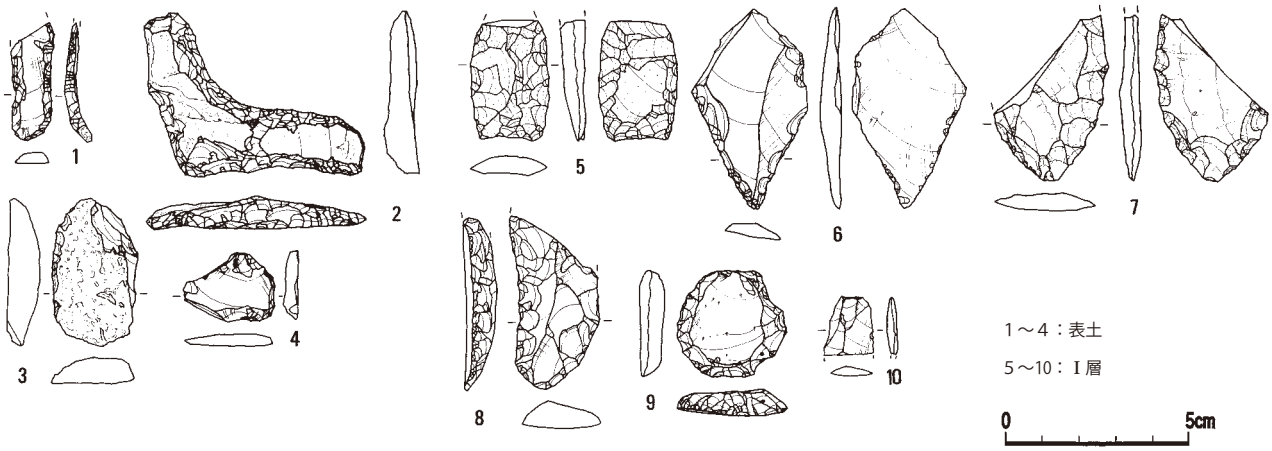
第10図　トレンチ１　遺構外（Ⅱ層）出土石器・鉄製品

石器　第12図5はⅡ群b類である。6･7はⅤ群a類である。7はAND製である。8･9はⅥ群d類である。10はⅧ群b類である。以上がⅠ層出土資料である。1･2はⅥ群d類である。3･4はⅧ群a類である。以上が表土出土資料である。

小　括

トレンチ1では、オホーツク文化期ソーメン状貼付文土器群を中心とした遺物が主にⅡ層から出土した。ＰＩＴ1（土坑）1基と焼土はⅡ層中に確認されたことから、これらの土器の時期に形成された遺構だと考えることができる。堆積と遺物の関係から、Ⅲ層の上面を生活面とし、遺構を含めてⅡ層が形成される時期がトレンチ1において人類活動が最も盛んな時期であったと考えられる。（髙橋鵬成）

第11図　トレンチ１　遺構外（Ⅰ層・表土）出土土器



第12図　トレンチ１　遺構外（Ⅰ層・表土）出土石器

トレンチ２

c9、d9グリッドを中心として、トレンチ1の南東側に1m×5mのトレンチ2を設定した（第2・13図）。調査開始前から、トレンチ範囲内ではレキの表面がいくつか確認できる状態になっていた。調査時には、それが広範囲に広がるレキ集中であることが確認されたため、レキ集中の性格を解明すべく、トレンチを拡張するなどして調査を行った。なお、セクション記録時には長軸西壁に幅30cmのサブトレンチを設定し、記録を行った。

層　位

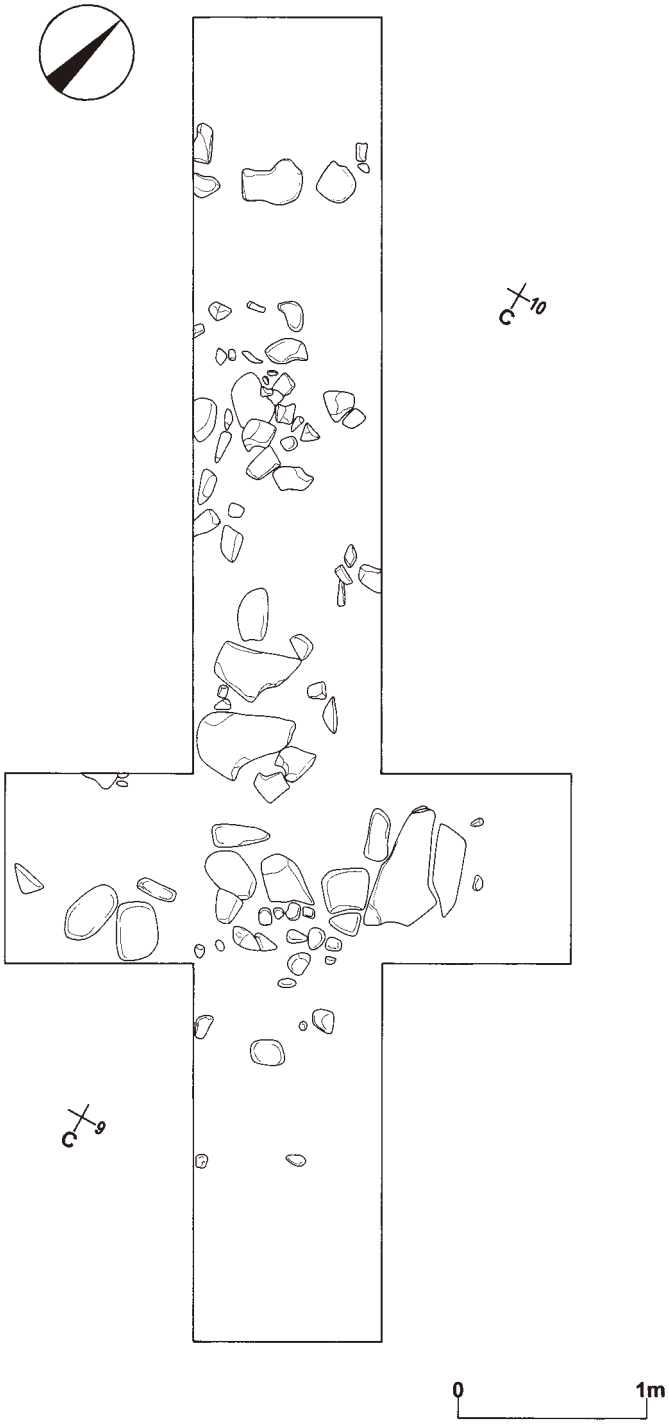
トレンチ２ではⅣ層まで確認した（第3図）。Ⅳ層を確認したのはトレンチ南東端の深掘りトレンチであり、トレンチ２全体はⅢ層の上面を検出したところで調査を終了している。表土・Ⅰ層は、しまりの弱い黒褐色土である。表土とⅠ層は土壌化の違いによって分層したが、本トレンチではⅠ層の堆積が非常に薄く、長軸南側ではⅠ層の堆積は2cmほど、厚く堆積している長軸北側でも、5cmほどである。Ⅱ層は褐色から黒褐色土である。10cm前後の厚さで、トレンチ全体に堆積しているのが確認された。レキ集中の底面もこのⅡ層中にある。Ⅲ層はしまりの強い黄褐色土である。深掘りトレンチで確認すると、Ⅰ層やⅡ層より厚い堆積である。遺物が出土するのはⅢ層の上側半分までで、それより下層ではほとんど見られなくなる。Ⅳ層はしまりがかなり強い黄褐色から灰褐色土である。遺物はほとんど出土していない。下層になるほど固くしまった土になってゆき、レキを含んでいる。レキの出現から、表土から80cmほど掘り下げたⅣ層中が地山であると考えられる。なお、トレンチ全体が南東―北西方向に傾斜しているため、北側の方が各層厚く堆積している。

遺物分布図

平面分布図（第14図）より、レキ集中の範囲外であるトレンチ長軸両端からの遺物出土が多いことが読み取れる。レキ集中内でも遺物の出土はみられるが、レキ集中の範囲外と比較するとやや少ない。また、垂直分布図より、トレンチの傾斜に沿って遺物が出土していることがわかる。セクション記録に伴い、南西端の深掘りトレンチと西壁のサブトレンチは、包含層中を掘削したので、他と比較して深い層からも遺物が出土している。レキ集中の範囲外では遺物が分散しているのに対して、レキ集中内ではレキを避けるようにしてレキの周囲から遺物が出土している。平面分布図・垂直分布図を合わせてみると、土器・石器・骨がトレンチ全体に散布しており、時折小レキや炭化物が混じることがわかる。これらには、明瞭な遺物集中箇所はみられない。また、レキ集中内外で遺物の出土傾向に変化がないことから、レキ集中と各遺物の関連性は低いと考えられる。

遺　構（レキ集中）

トレンチ２全体に広がっている（第13図）。調査開始当初から、トレンチの北西側に集中してレキの出土が見られたため、北西側にさらに1m×2mトレンチを拡張した。拡張後の範囲内でレキが次第に見られなくなることから、北西―南東方向に約5.5mの範囲を持つと想定される。また、最も多くレキが出土した箇所で、トレンチを東西両側に各1m×1m拡張したところ、拡張部でも小レキが多数出土したため、東西方向には少なくとも3mの広がりをもつと考えられる。さらに、トレンチの周囲を簡単に調査したところ、トレンチ外にもレキが多数埋まっている可能性が高いとみられ、本遺構はトレンチよりも広範囲にわたっていることが予想されたものの、今回の調査ではその全容を明らかするまでにはいたらなかった。本遺構を構成するレキの中には、地表面に露出しているものも見られたが、いずれも底面はⅡ層中にあったことから、レキ集中はⅡ層に伴う遺構で、広く浅く広



第13図　トレンチ２　平面図及びレキ集中図

がる平面的な形状をもつといえる。レキの大きさは数センチから数十センチまでさまざまで、円レキや平レキが多く、大きなレキは扁平なものが多い。中には割れており、近くのレキと接合するものも見られたが、人為的に割られたものではないと推察する。被熱したレキは1点もなく、意図的に配置したような規則性なども見られなかった。また、レキ集中の下層から遺構の検出はなかった。レキの周辺から土器や石器などの遺物が出土しているが、いずれも本遺構との関連性は低いと考えられる。

遺構外出土遺物

トレンチ２出土遺物について、遺物包含層ごとに土器、石器、石製品、骨製品の順に説明する。遺物の分類基準は、第1章　遺跡の概要・遺物の分類の項を参照していただきたい。

Ⅲ層（第15・16図）

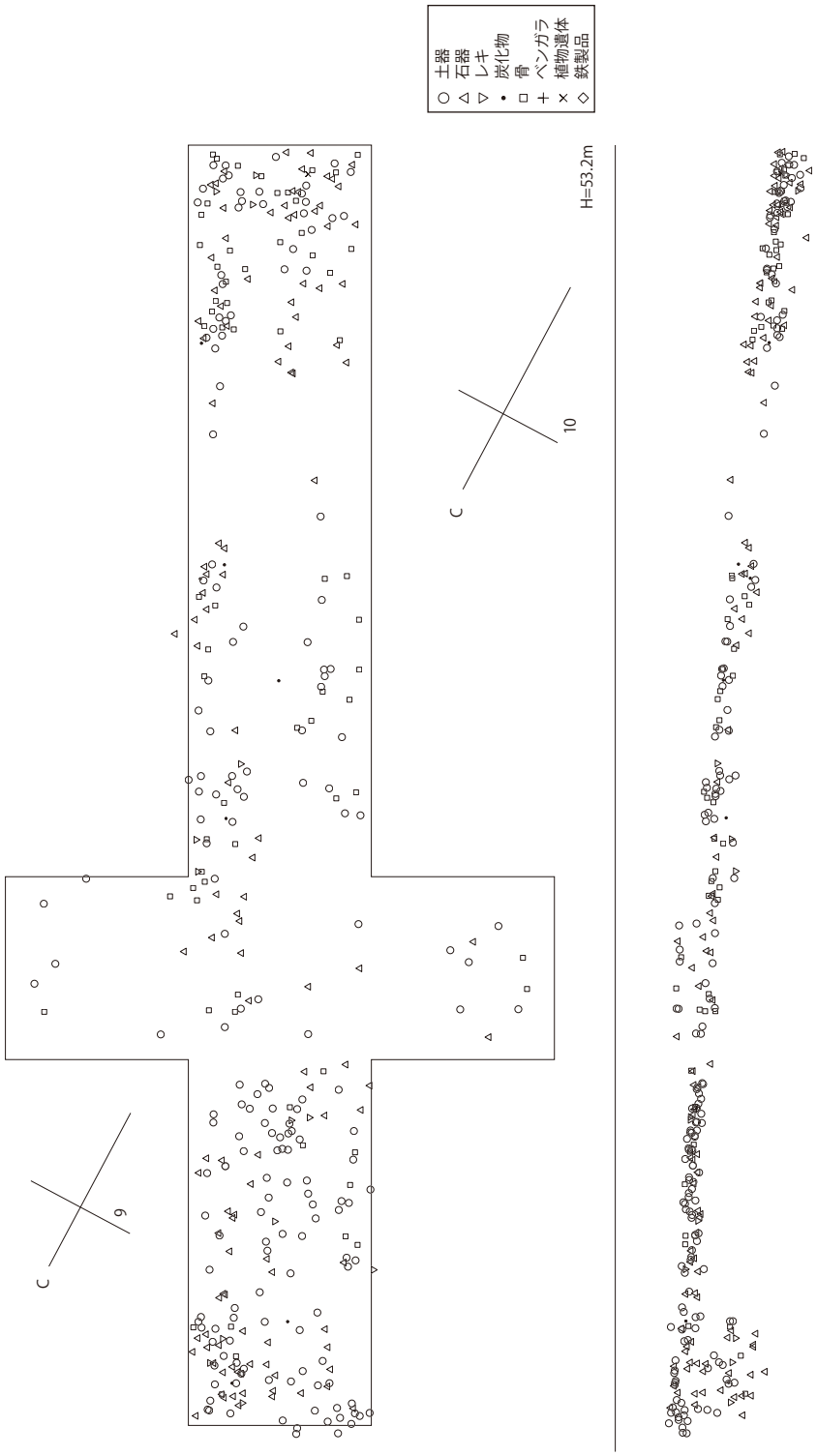
土器　第15図1はⅠ群口縁部破片である。トコロ6類土器であろう。文様は、縄文RLの施文後に縦方向の沈線文を等間隔で施文している。内面にも縄文RLが施文されている。2はⅠ群胴部破片である。3はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文で、粘土紐は押し付けられ断面四角である。

石器　第16図1~2はⅠ群で、いずれもOB製（以下、OB製は記載省略する）である。1はb類、2は基部の欠損品である。3はⅤ群a類である。4はⅧ群a類で縁辺に加工痕を有している。5はⅩⅠ群c類で、AND製である。6はⅩⅡ群c類で、黒曜石の原石が用いられている。

石製品　第16図7は装飾品で、HS製である。欠損品であるが、中央に穴があけられたドーナツ状の製品の断片である。全体的に表面が磨かれている。同トレンチⅠ層出土の第16図13と接合する。

Ⅱ層（第16・17・20図）

土器　第17図１はⅠ群胴部破片である。文様は、縄文RLである。トコロ6類土器であろう。2は時期特定のできない胴部破片である。文様は無文である。胎土中に含まれる雲母片が目立つ。破片の最下端に、輪積みの接着部から剥離したような割れ面が見られることから、縄文晩期か擦文期かのいずれかであろう。3はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。粘土紐は押し付けられて、平たくなっている。この層中のⅡ群土器は断面四角になるものがほとんどである。接合部に補修孔を有する。土器の内外面に炭化物が付着している。4はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。粘土紐の大部分は剥離し、施文痕が残った状態になっている。土器の内面に炭化物が付着している。5はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。6・7はⅡ群口縁部破片である。文様は無文である。7はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。土器の内面、外面には、炭化物が付着している。8はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文と、ボタン状貼付文である。9~10はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。土器の内外面には、炭化物が付着している。11はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、



第14図　トレンチ２　遺物平面・垂直分布図

粘土紐による直線文と、ボタン状貼付文である。ボタン状貼付文は楕円形をしており、直線文の下部にL字状に組み合わせて施文されている。土器の内面に炭化物が付着している。12はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による波線文である。土器の内外面に炭化物が付着している。13はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文である。14はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。土器の内外面には、炭化物が付着している。15はⅡ群底部破片である。土器の内面には、炭化物が付着している。

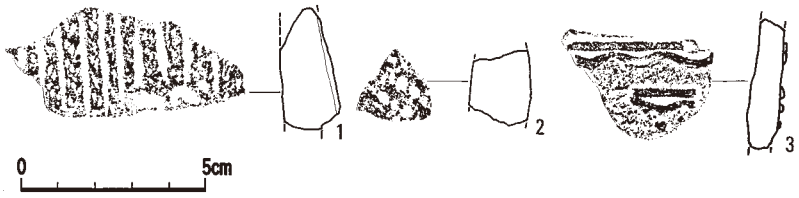
石器　第16図8はⅠ群c類で。9はⅤ群a類で、先端部の欠損品である。10はⅩⅠ群b類で、打ち欠いている。AND製である。

骨製品　第20図1は骨角器で、骨斧の一部である。鯨骨製で、基部の一部のみが出土し、柄部、刃部などは残存していない。上端の曲線部分は、滑らかに調整してある。全体が被熱し、黒色になっている。2は加工痕のある骨である。鯨骨製で、薄い板状に加工している。原材の破片とも考えられるが、小片のため、用途は不明である。

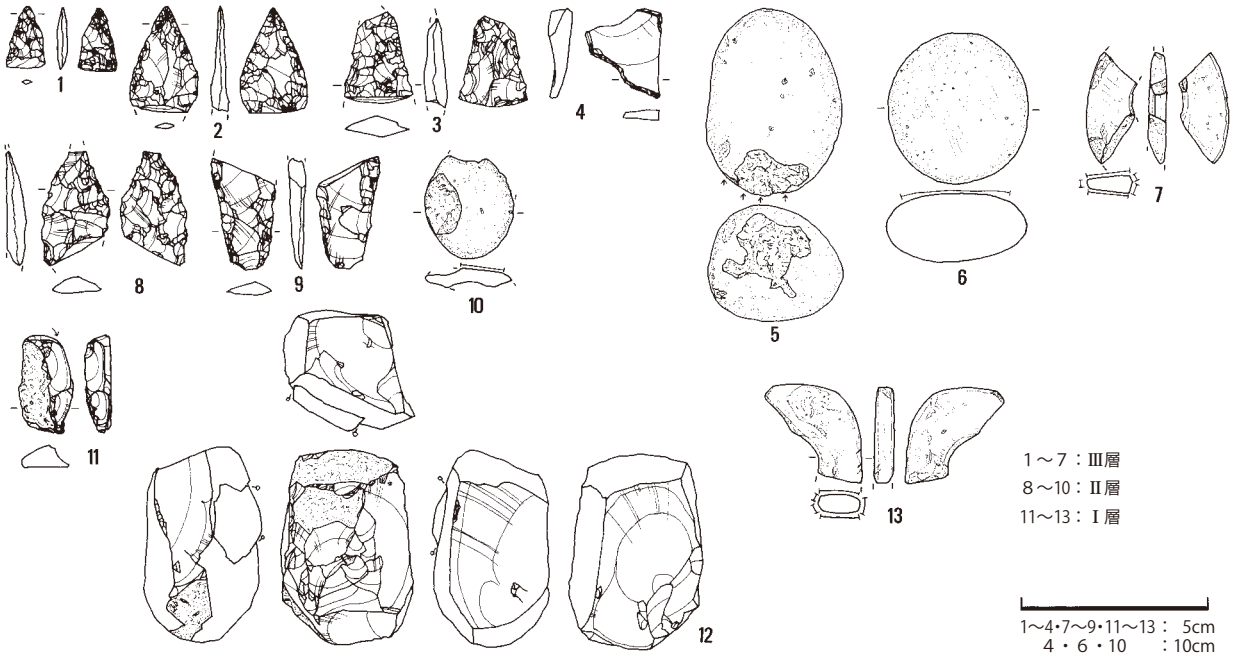
Ⅰ層（第16･18･20図）

土器　第18図1はⅠ群胴部破片である。文様は、縄文RLが施文されている。2はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文のうち、残存するのは波線文の一部のみで、直線文とボタン状貼付文は剥離し、施文痕が残った状態になっている。粘土紐は断面四角で以下のものも同様である。3はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。4・5はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。6はⅡ群底部である。底径は約4.5cmである。7･8はⅡ群底部破片である。内面には、炭化物が付着している。

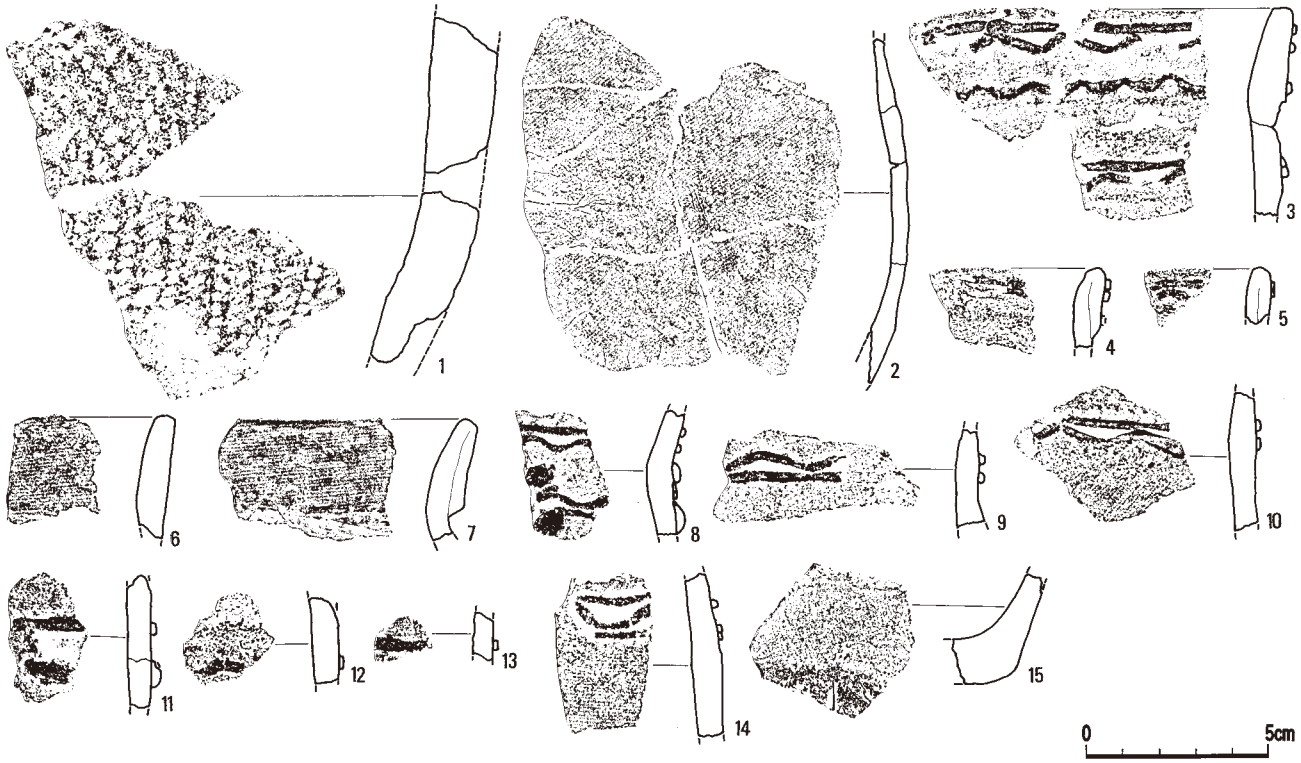
石器　第16図11はⅦ群彫器で、彫刀面が1箇所作られている。レキ面の残存部分がみられる。12はⅨ群b類で明確なプラット・フォームが見られない。



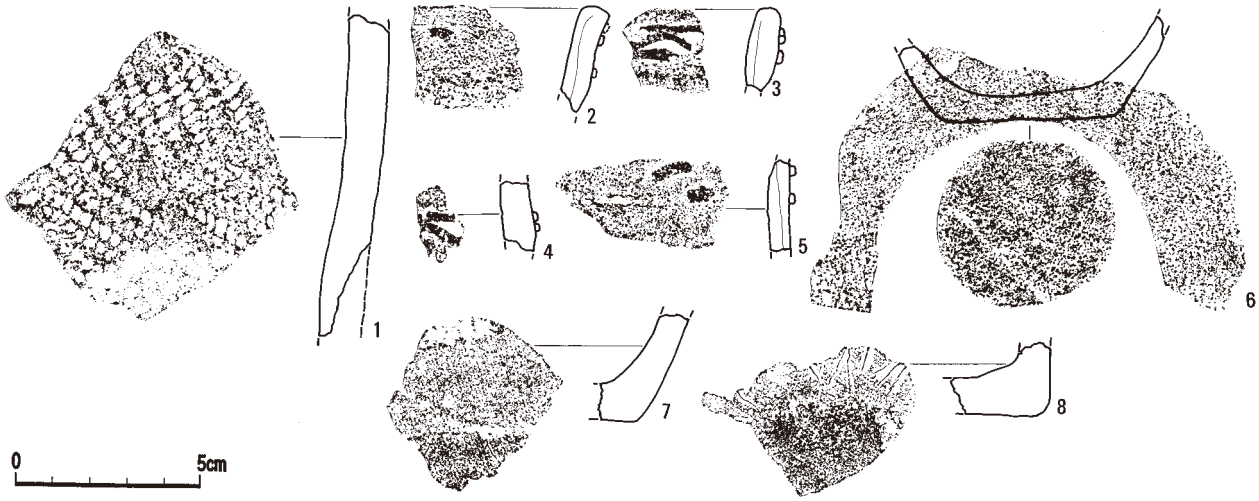
第15図　トレンチ２　遺構外（Ⅲ層）出土土器



第16図　トレンチ２　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器



第17図　トレンチ２　遺構外（Ⅱ層）出土土器



第18図　トレンチ２　遺構外（Ⅰ層）出土土器

石製品　第16図13は装飾品で、HS製である。全体的に表面が磨かれている。同トレンチⅢ層出土の第16図7と接合する。

骨製品　第20図3は加工痕のある骨である。海獣骨製で、削る際に角度をつけ、鋭角面を作り出している。このことから、骨鏃や銛先などの一部である可能性もあるが、小片のため全体像は不明である。全体が被熱し、白色になっている。

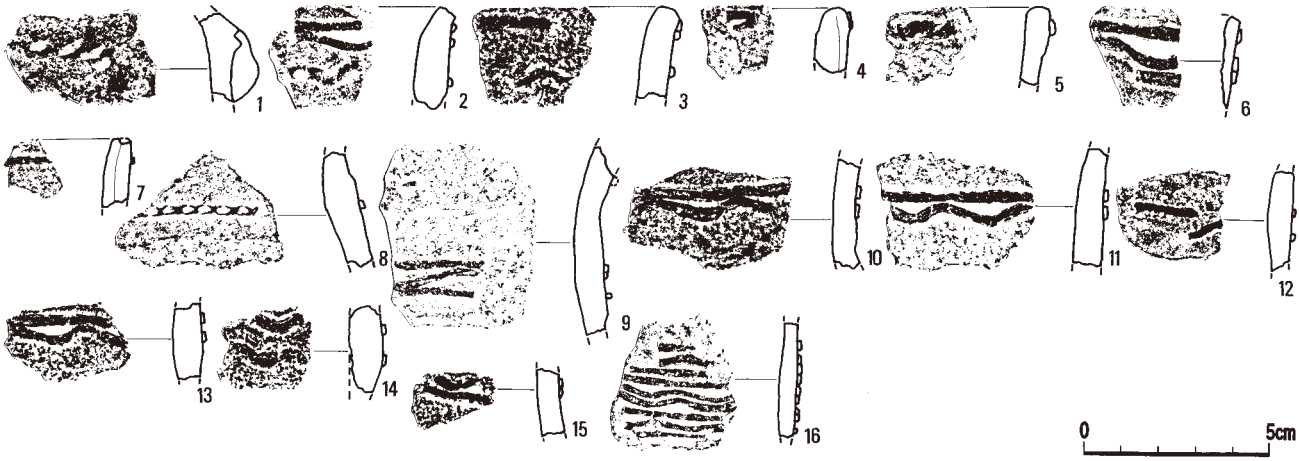
表土（第19･20図）

土器　第19図1はⅡ群胴部破片である。文様は、刻みをつけた太い粘土紐による貼付文（擬縄貼付文）と、吊耳状の貼付文である。擬縄貼付文の下部に、吊耳状の突起が施文されている。土器の内外面には、炭化物が付着している。2・3はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。粘土紐は断面四角で以下のものも同様である。3の内面には炭化物が付着している。4はⅡ群口縁部破片(折り返し口縁)である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。5はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による波線文である。貼付文は、2条のうち1条は剥離し、施文痕が残った状態になっている。6はⅡ群口縁部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。土器の外面、貼付文の間には炭化物が付着している。7はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文である。土器の内面に炭化物が付着している。8はⅡ群胴部破片である。文様は、刻みをつけた紐状の貼付文（擬縄貼付文）である。土器の内面に炭化物が付着している。9~16はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、粘土紐による直線文、波線文である。9･11･12･16の土器の内外面には炭化物が付着している。

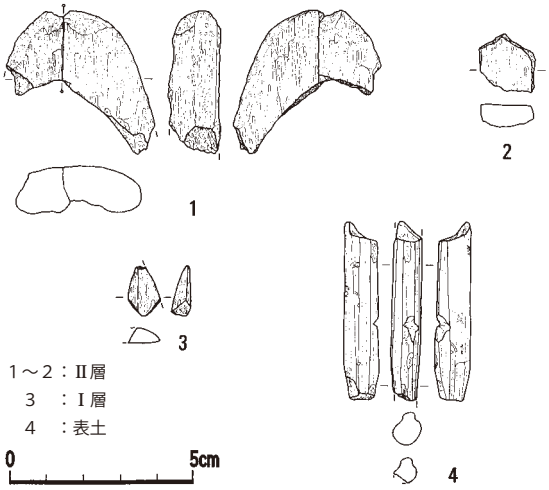
骨製品　第20図4は骨角器で、中柄と考えられる。海獣骨製で、両端は欠損している。全体の表面が滑らかに調整されており、縦方向には､2条の溝が彫られている。

小　括

本トレンチの最大の特徴は、トレンチ全域にレキ集中が確認されたことである。トレンチ内の状況からレキ集中を見ると、他の遺構が伴わないことや、遺物の出土傾向に大きな変化がないことから、レキ集中と出土遺物との関連性はそれほど高くないという見方ができる。しかし一方で、遺跡全体を視野に入れてレキ集中をみると、レキ集中はこの場所を意図的に選択して構築されたものであることが想定できる。レキはいずれもチャシコツ岬上では入手不可能で、河川や海岸など別の地点から持ち込まれたことが明確である。また、動物遺体の出土状況をみると、今年度の調査で最も多くの動物種、出土点数が見られたのが本トレンチであり、それらがレキ集中と同じⅡ層中から特に多く出土している。これらのことを考慮すると、何らかの目的により持ち込んだレキを本トレンチ付近に集積し、その周辺に動物骨を散布したことが推察される。遺物は、オホーツク文化期貼付文に属する土器を主に、縄文時代中期に属するトコロ６類土器や、石器、骨角器などがいくつか出土している。今年度の調査ではレキ集中の性格を特定することはできなかった。レキ集中の範囲確定と、レキ集中のもつ意味を明らかにすることが今後の調査課題の一つといえる。（大西　凜）



第19図　トレンチ２　遺構外（表土）出土土器



第20図　トレンチ２　遺構外（Ⅱ層・Ⅰ層・表土）出土骨製品

トレンチ３

A11とa11グリッドにまたがり、1×5mのトレンチを設定した。本調査区は5棟の竪穴住居跡に囲まれる場所に位置しており、墓域や祭祀跡等の遺構の存在を確認することを目的として掘削を実施した。トレンチ北側の長軸部分にサブトレンチを設定し、Ⅲ層上面まで確認することができたが時間的制約のためサブトレンチを除く部分については、Ⅱ層途中まで掘削するに留まった。本トレンチから遺構は検出されていない。

層　位

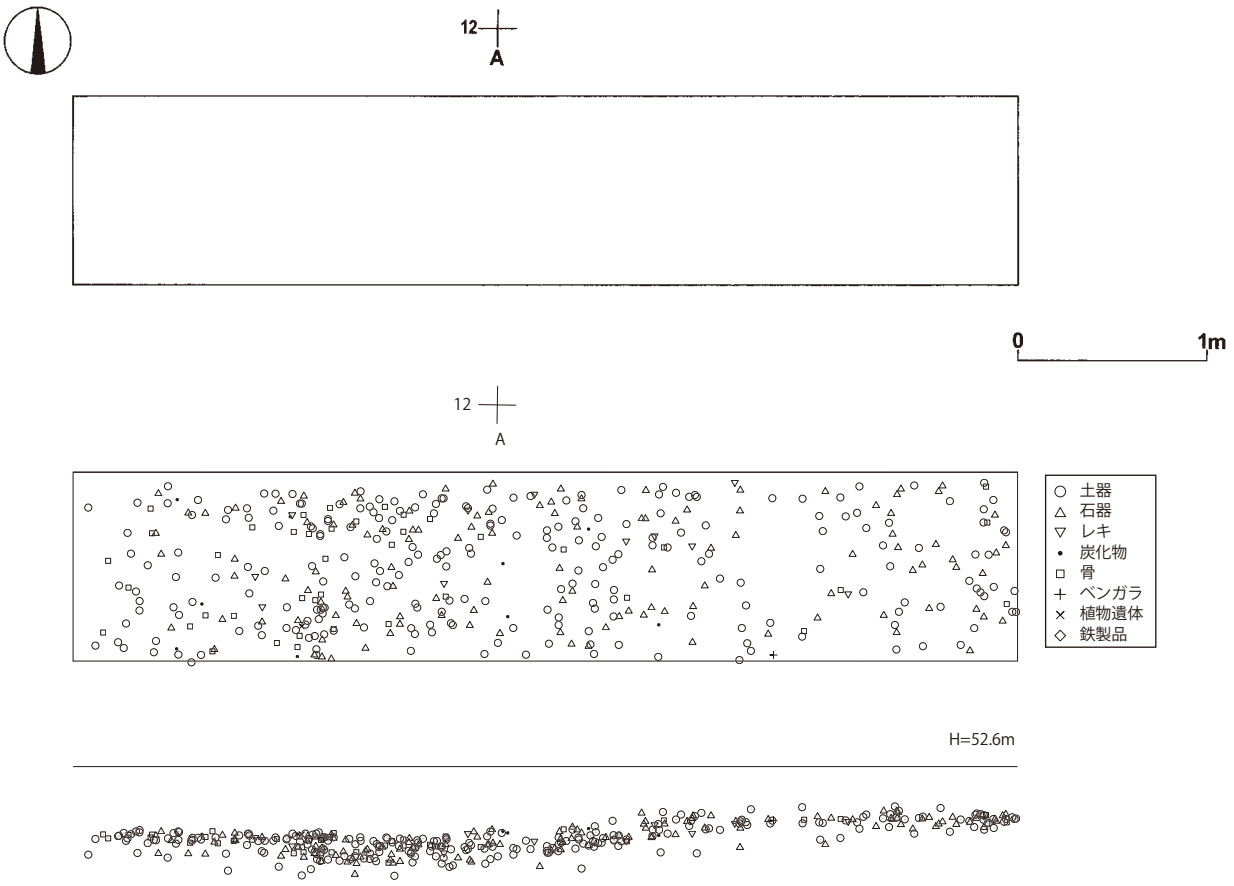
表土・Ⅰ層は、いずれも腐植土層であり、締まりの弱い黒褐色土である。分解が進み土壌化したものをⅠ層として分層を行った（第３図)。オホーツク文化期の遺物を包含する。層厚は6～10cm。

Ⅱ層は、黒褐色土～暗褐色土であり、上層と下層に分けられる。締まりはややある。オホーツク文化期の遺物を包含し、大小様々なレキを含む土層である。層厚は13～24cm。

Ⅲ層は、黄褐色土～黄灰色土であり、締まりは強い。オホーツク文化期の遺物を包含し、サブトレンチ内で確認されている。Ⅲ層掘削途中で調査を終了しているため、層厚は不明。

遺物分布図

平面分布図（第21図）では、トレンチ中央よりやや西側に遺物が集中していることが見てとれる。垂直分布図も同様であり、西側の地形的にやや低い部分に遺物が集中する傾向にある。また、種別でみると、土器・石器などには明瞭な集中箇所はなく全体的に広く分布することがわかるが、骨類に関してはトレンチ西側部分のやや低い箇所に集中するという傾向にある。



第21図　トレンチ３　平面図及び遺物平面・垂直分布図

遺構外出土遺物

トレンチ3出土遺物について、遺物包含層ごとに土器、石器、骨製品の順に説明する。遺物の分類基準は、第1章　遺跡の概要・遺物の分類の項を参照していただきたい。

Ⅲ層（第22･23･26図）

土器　第22図１はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様は、細い粘土紐による貼付文と口縁上端に竹管状の工具で施文した刺突文が見られる。2はⅡ群口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は幅の狭い折り返し口縁である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文が口縁部と頸部の２段に分かれて配置されている。3はⅡ群口縁部から頸部にかけての破片で、折り返し口縁である。文様の貼付文は、刻みをつけた細い紐状の貼付文（擬縄貼付文）と、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。4～7は、Ⅱ群土器の口縁部土器片である。5以外は、折り返し口縁である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文の組み合わせである。9～14は、Ⅱ群土器の胴部破片である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文である。15･16は、Ⅱ群土器の底部破片である。土器の内面に炭化物が付着している。

石器　第23図1･２はⅠ群a類で、3･4はⅠ群c類である。5はⅣ群c類である。6･7はⅦ群a類である。

骨製品　第26図1は加工痕のある海獣骨である。被熱により全体が白く変色している。端材の可能性がある。

Ⅱ層（第23･24･26図）

土器　第24図1はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様は、刻みを付けた細い紐状の貼付文（擬縄貼付文）である。2はⅡ群土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は折り返し口縁である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。3はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と、緩やかな曲線を描くと思われる貼付文である。4はⅡ群口縁部破片(折り返し口縁)である。文様の貼付文は細い粘土紐による波線文である。5はⅡ群口縁部破片であり、文様は貼付文である。器面に細い粘土紐による波線文が付されていた跡が確認できる。6はⅡ群口縁部から同部にかけての破片である。文様は、無文である。残存部から口径約12cmと推測される。7･8は、Ⅱ群土器の口縁部破片である。8は折り返し口縁である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。9はⅡ群土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口径は21.3cmである。文様は、貼付文である。施文部位は、

口縁部、口縁部と頸部の境、頸部、胴部の大きく4つに分けられる。口縁部の文様は細い粘土紐による波線文の上下に直線文を配置したものが1セットとなっている。これと同じものが胴部にも配置されている。口縁部と頸部の境には、細い粘土紐による波線文が1条施文されている。頸部には、細い粘土紐による直線文の下に、波線文を配置したものが1セットとなっている。内外面の口縁部から頸部にかけて炭化物が付着している。10・12～14は、Ⅱ群口縁部破片である。10・12は折り返し口縁である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。11・15・16・18はⅡ群口縁部と胴部破片である。文様の貼付文は、刻みを付けた細い紐状の貼付文（擬縄貼付文）と細い粘土紐による波線文である。17・19～28は、Ⅱ群胴部破片である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文のみのものと、直線文と波線文の組み合わせによるものがある。粘土紐は、丸みを帯びたものと断面四角のものがある。29・30は、Ⅱ群胴部破片である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。31・32は、Ⅱ群土器の底部破片で、内面に炭化物が付着している。

石器　第23図8・9は、Ⅰ群a類である。9は全体的に強く被熱している。10～14は、Ⅰ群b類である。15はⅡ群a類である。16はⅥ群ｄ類、17はⅥ群ｂ類である。18～24は、Ⅷ群a類である。25はⅩⅢ群c類で、SS製である。

骨製品　第26図2は加工痕のある海獣骨である。被熱により全体が白く変色している。板状に加工されているが、あまりにも小片のため、用途は不明である。3は加工痕のある海獣骨である。端材の一部と思われる。4は海獣骨である。上端は、段状に加工されている。5は海獣骨製の未成品である。それぞれ異なる方向から加工された穿孔が2カ所見られる。

Ⅰ層・表土（第23・25・26図）

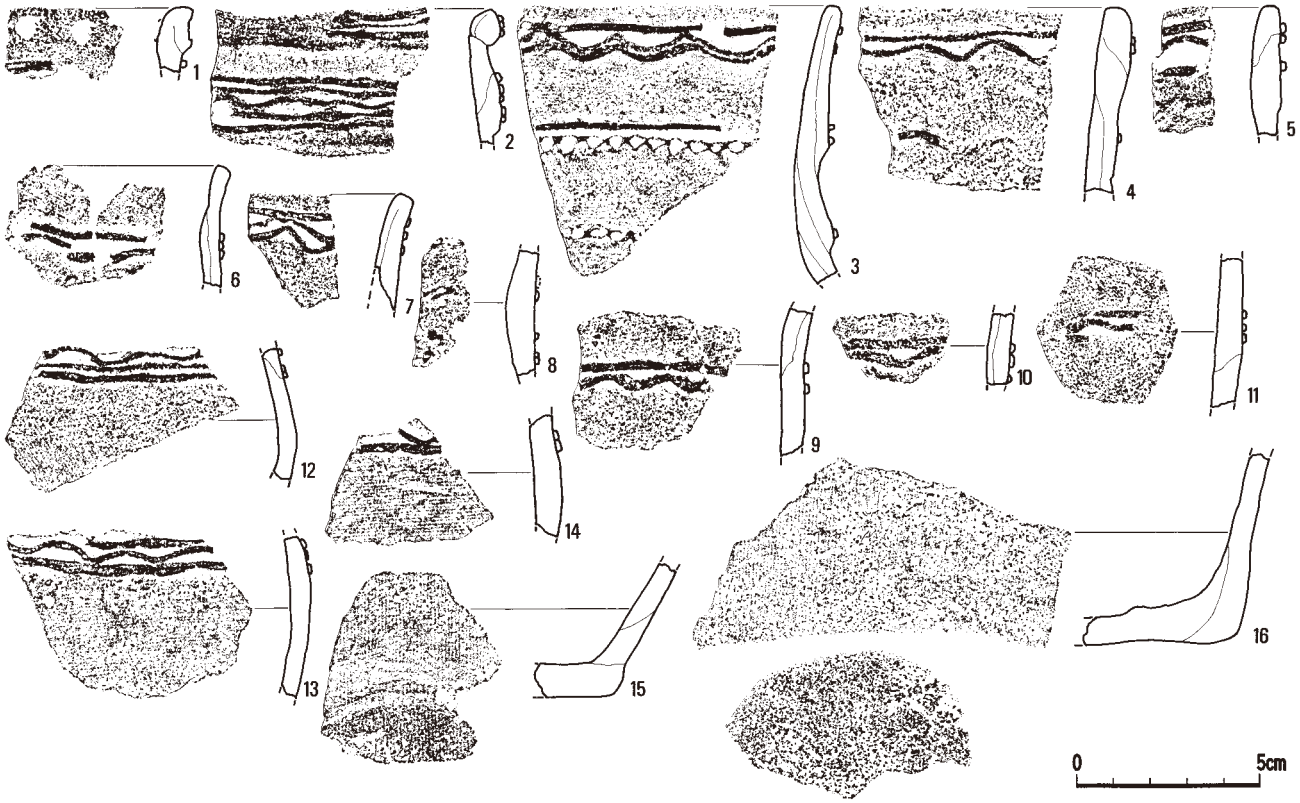
土器　第25図1はⅡ群口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は、幅の狭い折り返し口縁である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文であり、3段に分かれて配置されている。2はⅡ群頸部破片である。文様の貼付文は、刻みを付けた細い紐状の貼付文（擬縄貼付文）である。3はⅡ群土器の頸部から胴部の破片である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。４はⅡ群頸部破片である。文様の貼付文は、断面四角の細い粘土紐による直線文と波線文である。上端に直線文が1条施文され、その下に7条の波線文が付されている。5はⅡ群口縁部破片（折り返し口縁）である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文である。6はⅡ群口縁部破片である。文様は無文である。7はⅡ群胴部破片である。文様の貼付文は、細い粘土紐による直線文と波線文である。

石器　第23図26は、Ⅰ群a類で、小型の木葉形である。

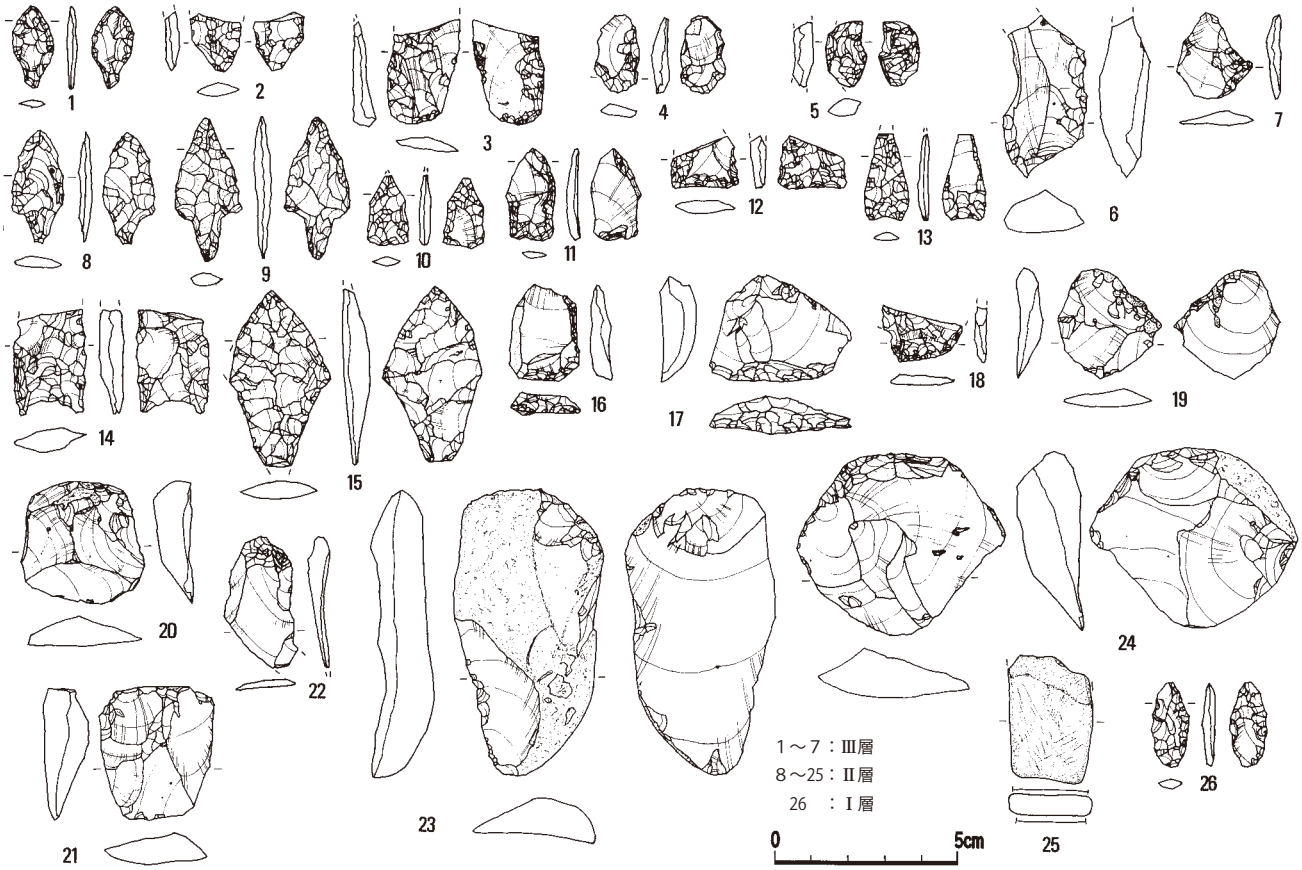
骨製品　第26図6は、加工痕のある海獣骨である。被熱され炭化している。薄く板状に加工されているが、用途は不明である。

小　括

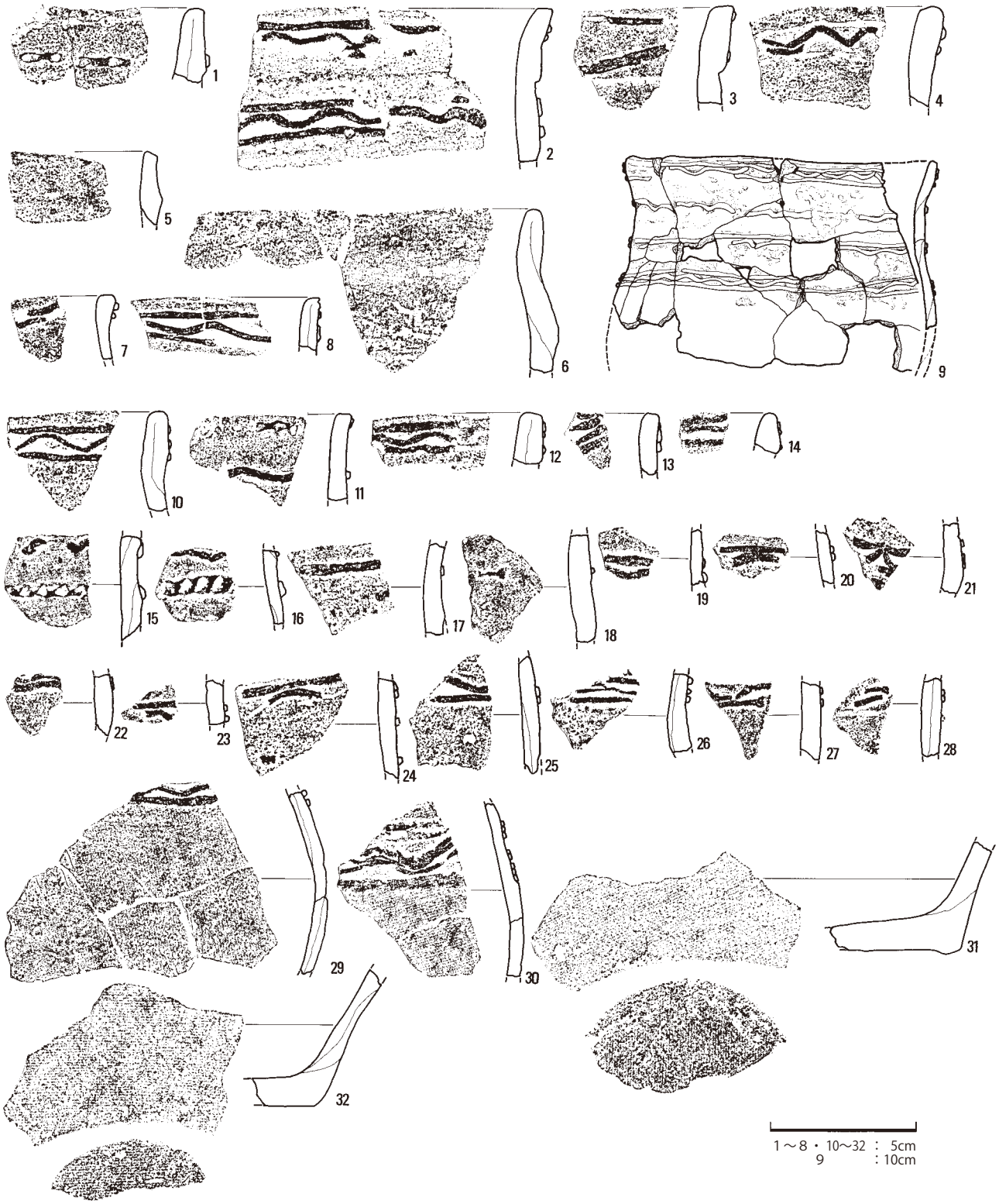
トレンチ3では、オホーツク文化期の貼付文土器群を中心とした遺物が主にⅡ層から出土している。他のトレンチと異なり、遺構は検出されていないが、ベンガラ粒がトレンチ内南東側より出土していることから、近くにベンガラを伴うような遺構が存在する可能性がある。また、石鏃や石銛などの狩猟具がトレンチ西側のやや低く沈み込む部分に集中する傾向にあり、これは骨製品の分布とも重なっている。（平河内　毅）



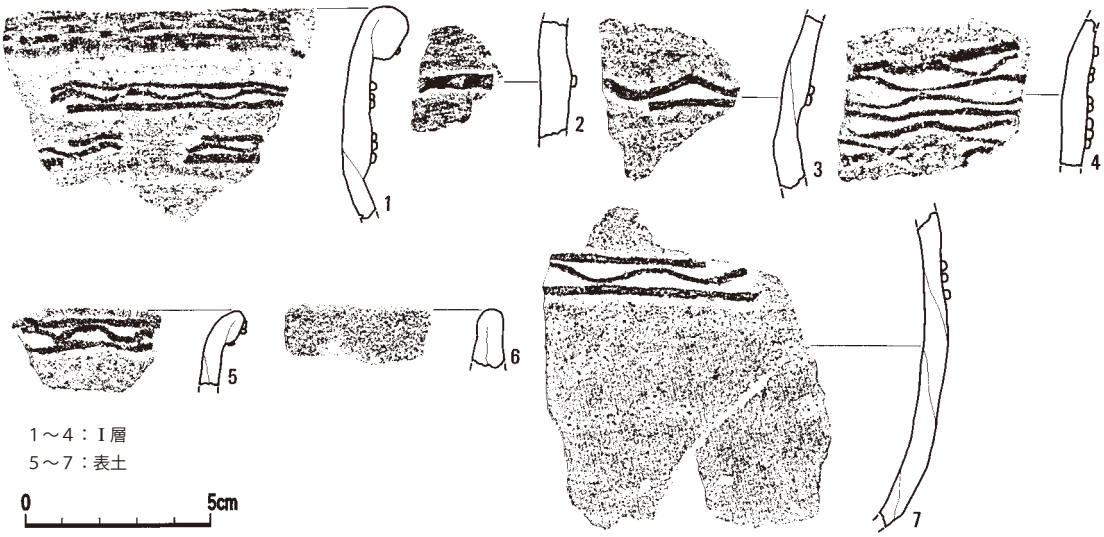
第22図　トレンチ３　遺構外（Ⅲ層上部）出土土器



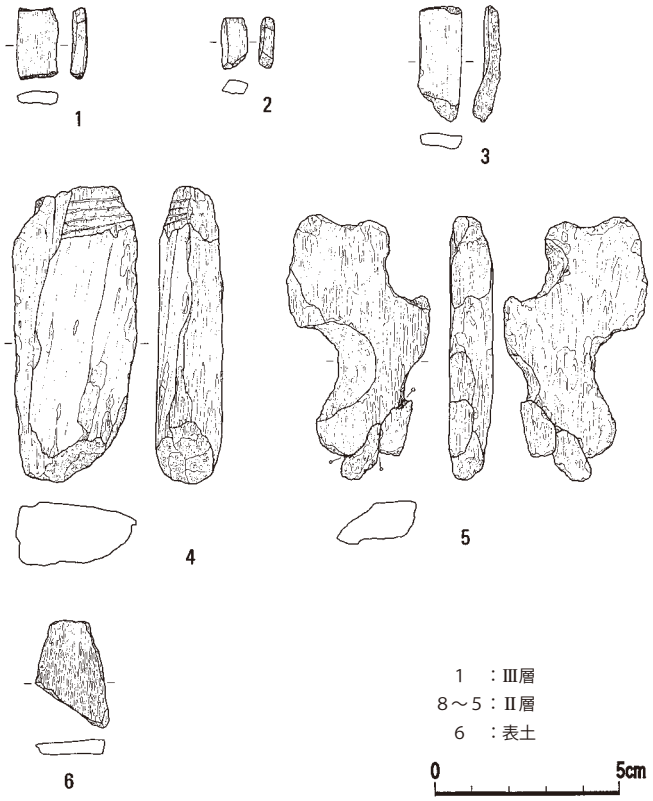
第23図　トレンチ３　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器



第24図　トレンチ３　遺構外（Ⅱ層）出土土器



第25図　トレンチ３　遺構外（Ⅰ層・表土）出土土器



第26図　トレンチ３　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層・表土）出土骨製品

まとめにかえて

チャシコツ岬上遺跡は、1955年に発刊された斜里町史第一巻先史時代史の中で、「チャシコツの上部には24個の竪穴住居趾群があり、竪穴内からオホーツク式土器が、竪穴付近から北筒式土器片が発見されている」と河野広道氏により紹介されている。また、宇田川（1981）の河野広道ノート・考古編1の中に、前述の町史の記載の基礎となった1949年にボーリング調査（試掘調査か）を丘頂部などで行ったことが日誌記録として記載されている。河野氏の調査の後は、1977年に北大の大井晴男氏らによる岬上平坦地一体の竪穴住居跡群測量調査が実施されるまで、記録として残されるような調査はされていない。

このような状況の中で、古くからオホーツク文化期の集落群として注目されながらも手を付けず残していた、当遺跡の存在の意義及び価値を問い質す調査が今年度から始まったのである。この調査は、大井（1984）が「道東型のオホーツク文化」の荷負者の集落利用から、続いて「トビニタイ文化」の荷負者によっても集落として利用されていたのかと言う命題を解決する重要な役割を担い、さらにオホーツク文化の集落変遷過程を考える上で欠かすことのできない遺跡であることを立証する重要な役割を担っているのである。今回の調査では約30棟の竪穴住居跡の間隙を縫って3列のトレンチを開ける調査を実施した。この調査結果から得られた土器と動物遺体の情報を基に以下、若干の考察を行う。

1.チャシコツ岬上遺跡出土オホーツク貼付文系土器群について

本年度の調査により、チャシコツ岬上遺跡出土土器の主体はオホーツク文化期の貼付文系土器であることが明らかになった。本稿では、遺跡から出土した貼付文系土器群の位置づけとその特徴について考察してみる。しかしながら、今回の調査で出土した土器の多くは口縁部や胴部等の破片で、僅かに形状が把握できる個体は2個体のみであり、精度が高い考察にはいたらないことをご承知いただきたい。

本遺跡出土の貼付文系土器群は、器形及び文様形態を見る限りでは藤本編年のe群に属するものと考えられる。細い紐状の粘土を付したソーメン状貼付文を主体として、直線文や波線文が器面を数条めぐるタイプの土器が大半を占めている。これらのうち、直線文と波線文組み合わせを1単位とし、口縁部から胴部にかけてその組み合わせを3～4段配置する文様形態を示すものが調査区の全トレンチから共通して出土している。このような文様形態のものは、藤本e群の中でも時期的に新しい段階ものととらえられる。すなわち、規則性のない貼付文が口縁部から頸部にかけて集中して配置される段階から、規則性を持つ文様帯が口縁部から胴部にかけて幅広く配置される段階へと漸移的に移行したものと考えられる。また、本遺跡出土土器に付されるソーメン状貼付文は断面円形を呈するものと、平たく押しつぶされ断面四角形になるものの2種類に分類することができる。このようなソーメン状貼付文の形態による時期差等の詳細は明らかではないが、擦文文化との融合・接触による要素の1つである可能性は否定できない。融合・接触の1つの形として、オホーツク貼付文系土器群より後に登場し、トビニタイ土器群Ⅱ以前に位置づけられている伊茶仁カリカリウス遺跡出土土器群があげられる。この伊茶仁カリカリウス遺跡出土土器群は、器面をめぐる貼付文がある軸を境に線対称に展開する「トビニタイ式文様構成」を例外なく有するとされている（榊田2006）。本遺跡出土貼付文系土器群には、文様構成にある程度の規則性は感じられるものの、伊茶仁カリカリウス遺跡出土土器群にみられるような「トビニタイ式文様構成」を明確に含む資料はみられない。現段階では、断面四角形のソーメン状貼付文をトビニタイ文化的要素ととらえるよりは、オホーツク貼付文系土器の文様要素としてとらえるのが妥当で、本遺跡出土の貼付文系土器群はオホーツク貼付文系土器の最終形態と考えてよいのではないだろうか。

いずれにせよ今後の調査資料の増加を待ち、文様形態だけでなく、様々な側面から検討し、結論を導き出したい。

（平河内　毅）

2.チャシコツ岬上遺跡から検出された動物遺体

今回の調査では地点遺物・一括遺物合わせて191点の動物遺体が出土した。土壌水洗などは行われていない。その大部分が海獣類の小さな骨片であり、詳しい同定が可能なものは極めて少ない。海獣類の同定には斜里町立知床博物館の資料を使用した。以下に同定された種名を示す。

軟体動物門	Phylum Mollusca
貝殻亜門の一種	Conchifera class indet.
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
魚綱	Class Pisces
ホッケ	*Pleurogramus azonus*
鳥綱	Class Avia
鳥類の一種	Avia ord. indet.

哺乳綱	Class Mammalia
イヌ科の一種？	Canidae gen. indet.
イタチ科の一種？	Mustelidae gen. indet.
ゴマフアザラシ	*Phoca largha*
トド	*Eumetopias jubatus*
鯨目の一種	Cetacea fam. indet.
マイルカ上科の一種	Delphinoidae fam. indet.

所　見

出土した動物遺体は焼けた骨片が卓越し、変形・破損したものが多い。また、熱を受けていない骨でも、脆弱な骨質のために詳しい同定が不可能なものが多かった。そのような中でも、骨質の観察から海獣骨片が多く見られた。一方で、魚類はホッケの椎骨が1点、鳥類も不明尺骨破片1点を数えたのみで、陸獣類も極僅かしか見られなかった。海獣骨ではアザラシ類とトドをはじめとする鰭脚類が比較的多く見られた。クジラ類では、大型の椎骨と指骨のほかに、イルカ類と思われる小型の椎骨が見受けられた。海獣骨片としたものの中には、先に述べた鰭脚類のほかにクジラ類の骨片も多く含まれていると考えられる。

層位毎に見てみると、Ⅲ層からの出土は少なく、Ⅱ層からの出土量が最も多く、次いで表土・Ⅰ層であることがわかる。また、Ⅱ層からは非常に多くの焼骨が検出されており、含まれる動物種数も最も多い。トレンチごとに見てみると、最も出土量、動物種数が多いのがトレンチ2であり、次いでトレンチ3、トレンチ1という状況である。トレンチ1のⅡ層中から発見されたＰＩＴ1からは、ごくわずかな動物遺体しか検出されず、すべて焼骨であった。以上のことから、今回のトレンチ周辺では、Ⅱ層の時期に海獣類を主体とした動物遺体がトレンチ2付近に残され、その多くが熱を受けるような人類活動が行われていたと考えられる。トレンチ1においてⅡ層中で確認された焼土周辺で利用された動物資源が、隣接するトレンチ2付近で破棄された可能性も示唆される。また、骨斧の材料などに利用可能なクジラ類の骨が確認されたことも人類活動を復元するうえで示唆的である。

（髙橋　鵬成・大西　凜：慶応義塾大学大学院）

表１　動物遺体出土量

層位	トレンチ1	トレンチ2	トレンチ3	計
表土 Ⅰ	トド 大腿骨遠位部L・1, 鰭脚類 仙骨破片・1, 海獣骨片・6, 陸獣類 肋骨破片・1, 不明骨片・5(全被熱)	ゴマフアザラシ 鼓骨R・1, アザラシ類 下顎骨R・1, 鰭脚類 四肢骨骨幹部破片・1, 海獣骨片・24(全被熱), 陸獣類 椎骨破片・4, 陸獣骨片・1(被熱), 不明骨片・2(全被熱)	海獣骨片・4(全被熱), 陸獣類 肋骨破片・1(被熱), 不明骨片・3	57
Ⅱ	クジラ類 指骨・1 椎骨・1, 海獣骨片・5(4/5被熱), 陸獣類 頭蓋骨破片・3(全被熱), 不明骨片・4(2/4被熱) PIT1[海獣骨片・4(前被熱), 陸獣骨片・3（全被熱）]	ホッケ 椎骨・1, 鳥類 橈骨骨幹部破片・1(被熱), アザラシ類 上顎骨R・1 後頭顆R・1, クジラ類 肋骨破片・1, 海獣骨片・38(33/38被熱), 陸獣類 頭蓋骨破片・1(被熱), 椎骨破片・1, 不明骨片・5(全被熱)	貝片・3(全被熱), イタチ科？ 末節骨・1(被熱), イヌ科？ 肋骨・1(被熱), 鰭脚類 椎骨・1, イルカ類 椎骨・2, 海獣骨片・24(全被熱), 陸獣類 肋骨破片・1(被熱), 陸獣骨片・2(全被熱), 不明骨片8(全被熱)	113
Ⅲ		アザラシ類 上顎骨破片L・1, 海獣骨片・13（全被熱), 不明骨片・3(全被熱)	海獣骨片・4(3/4被熱)	21
計	35	101	55	191

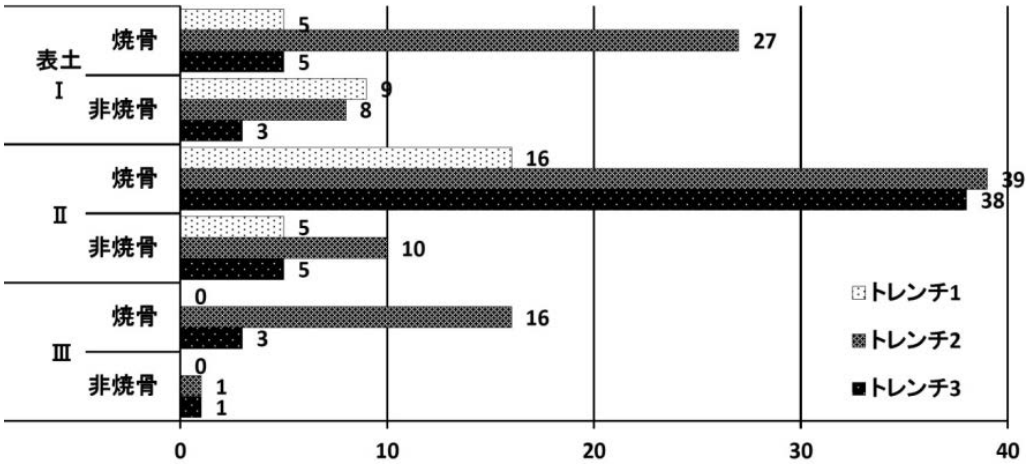


図１　焼骨・非焼骨出土量

参考文献

榊田朋広　2006 「トビニタイ式土器と擦文土器の形式間交渉と動態」『物質文化』84、p43～69

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちゃしこつみさきうえいせき
書　　名	チャシコツ岬上遺跡
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	斜里町文化財調査報告
シリーズ番号	ＸＸＸⅦ
編著者名	松田　功・平河内　毅・髙橋鵬成・大西　凜
編集機関	斜里町教育委員会
所在地	〒099-4113　北海道斜里郡斜里町本町12番地　TEL 0152-23-3131
発行年月日	平成26（西暦2014）年３月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
チャシコツ岬上遺跡	斜里郡 斜里町 ウトロ西 地先国有林	01545	21	44 04 00	144 58 40	2013. 9.3～ 9.17	20㎡	遺跡の内容を確認するための学術発掘調査（保存目的のための内容確認調査）である。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
チャシコツ岬上遺跡	集落 遺物包含地	縄文中期 オホーツク文化期	オホーツク文化期の竪穴住居跡、土坑、レキ集中	縄文中期（トコロ６類）土器・オホーツク（貼付文）土器・擦文？土器 石器	オホーツク文化期の集落跡。発掘調査では土坑、レキ集中を検出。

遺跡遠景（カメ岩）

測量作業風景（１）

測量作業風景（２）

トレンチ１　土器出土状況

トレンチ１　土層セクション

トレンチ１　完掘状況

トレンチ１　埋戻し後の状況

トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）掘削前状況

トレンチ１　Ⅰ層土器出土状況

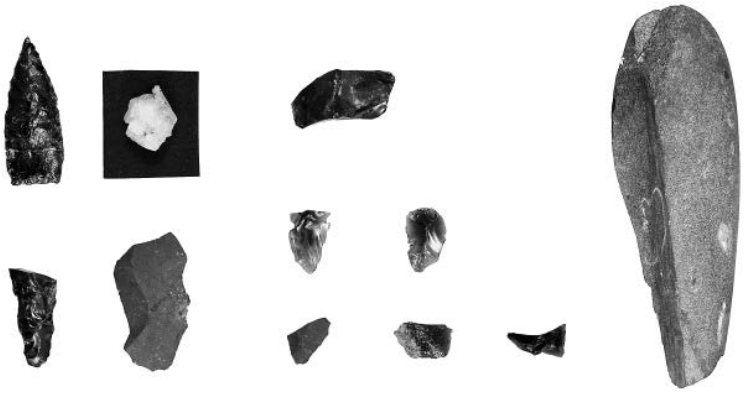
トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）掘削状況

トレンチ１　Ⅱ層土器出土状況

トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）完掘状況

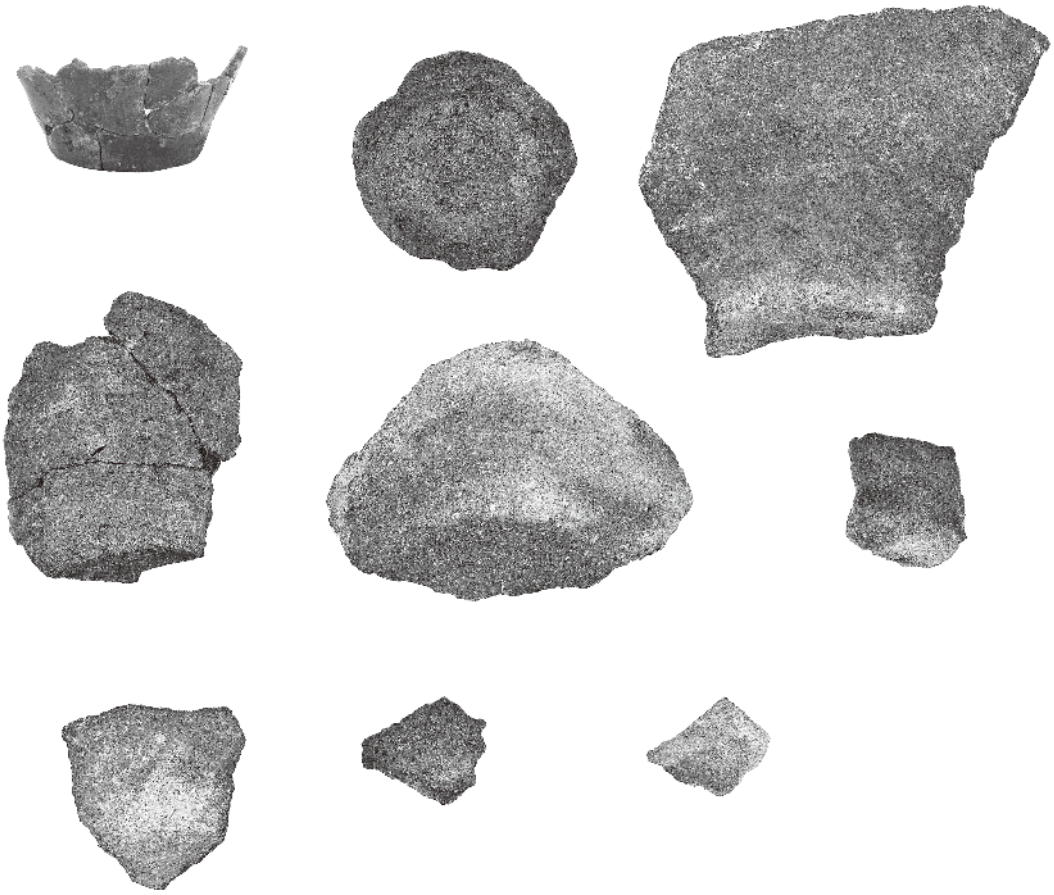
トレンチ１　作業風景

トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）焼土範囲・覆土出土土器

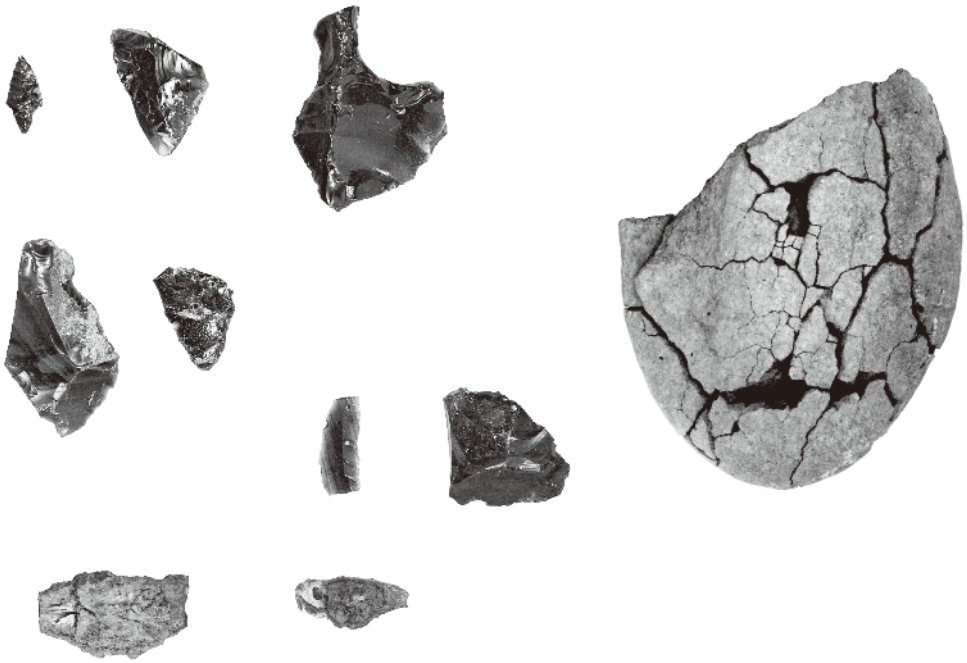


トレンチ１　ＰＩＴ１（土坑）覆土出土石器

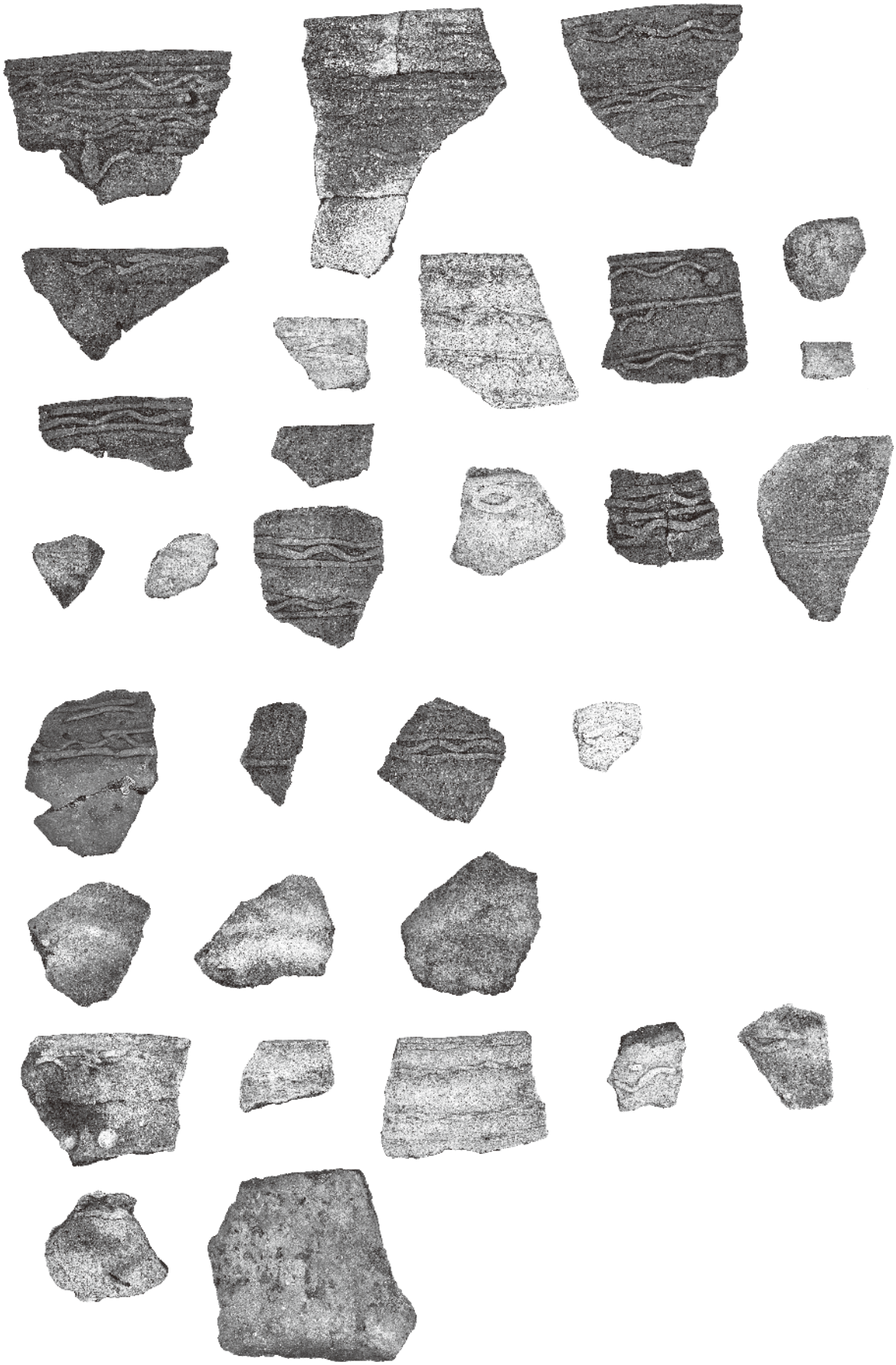
トレンチ１　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層）出土土器（１）



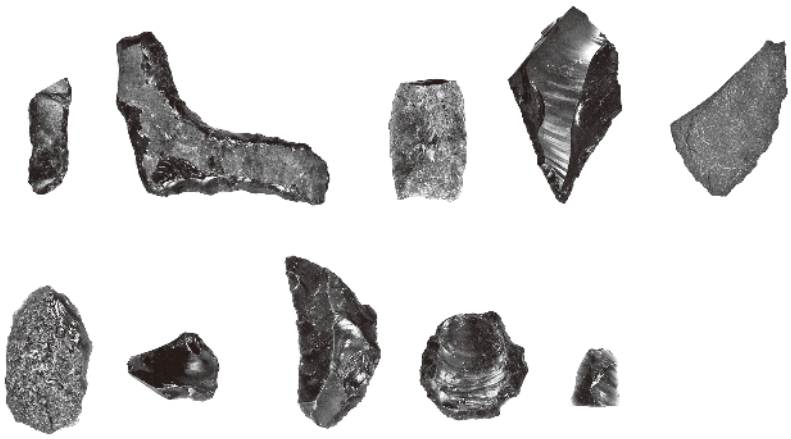
トレンチ１　遺構外（Ⅱ層）出土土器（２）



トレンチ１　遺構外（Ⅱ層）出土石器・鉄製品



トレンチ１　遺構外（Ｉ層・表土）出土土器



トレンチ１　遺構外（Ｉ層・表土）出土石器

発掘風景　集合写真

トレンチ２　掘削前状況

トレンチ２　完掘状況

トレンチ２　表土　レキ集中出土状況

トレンチ２　レキ集中出土状況　NW→

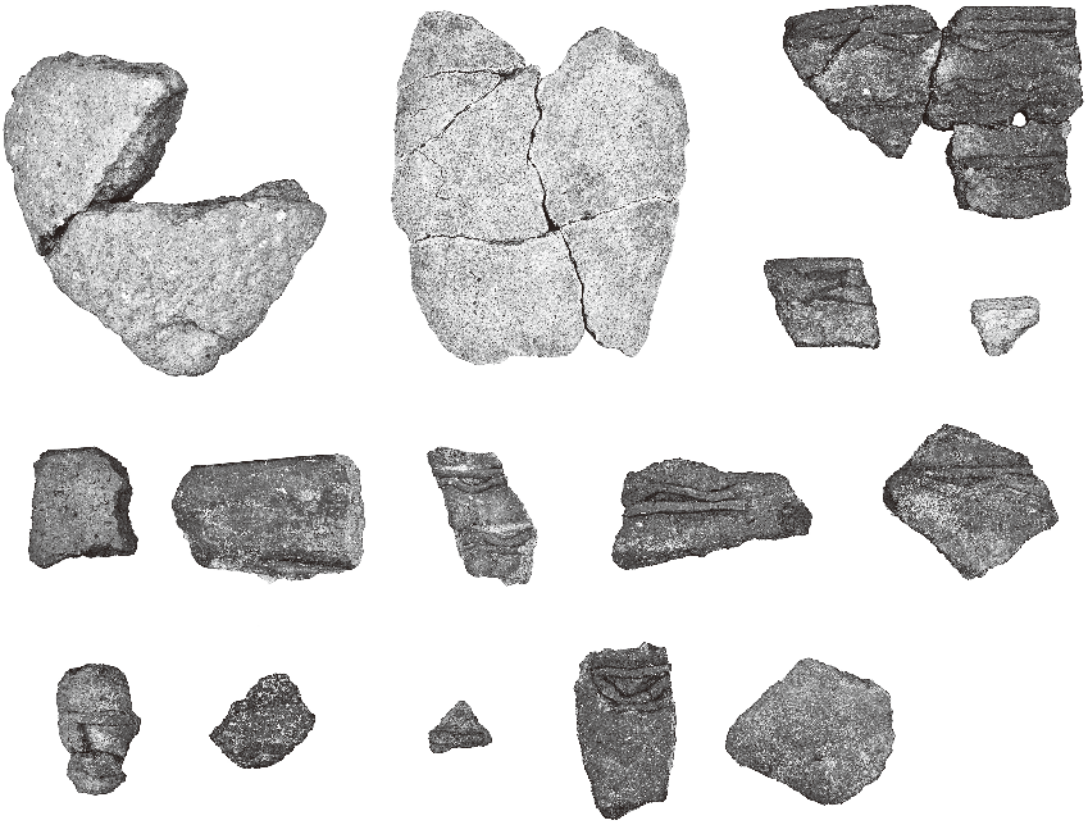
トレンチ２　レキ集中出土状況　E→

トレンチ２　石器出土状況

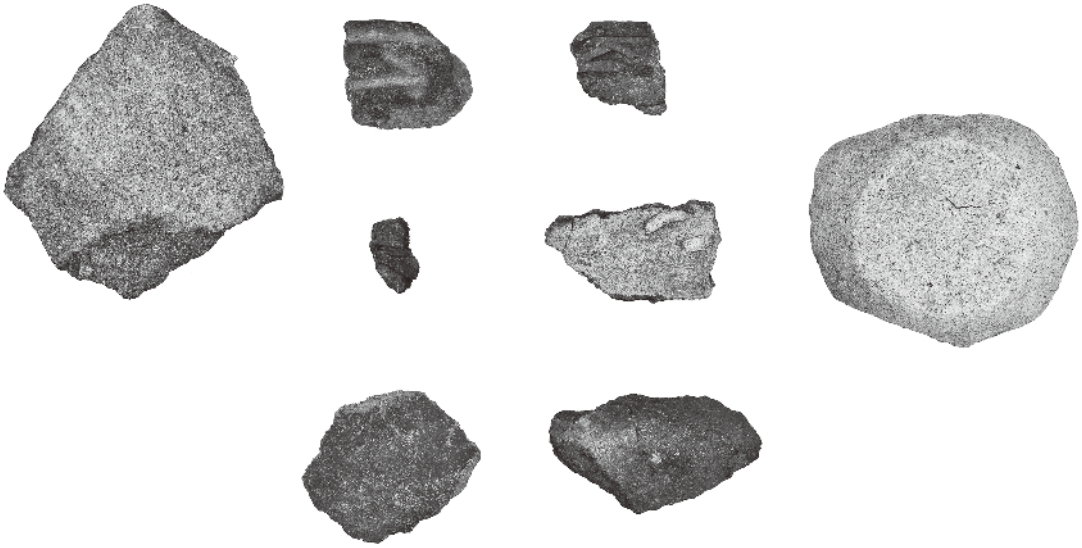
トレンチ２　骨出土状況

トレンチ２　作業風景

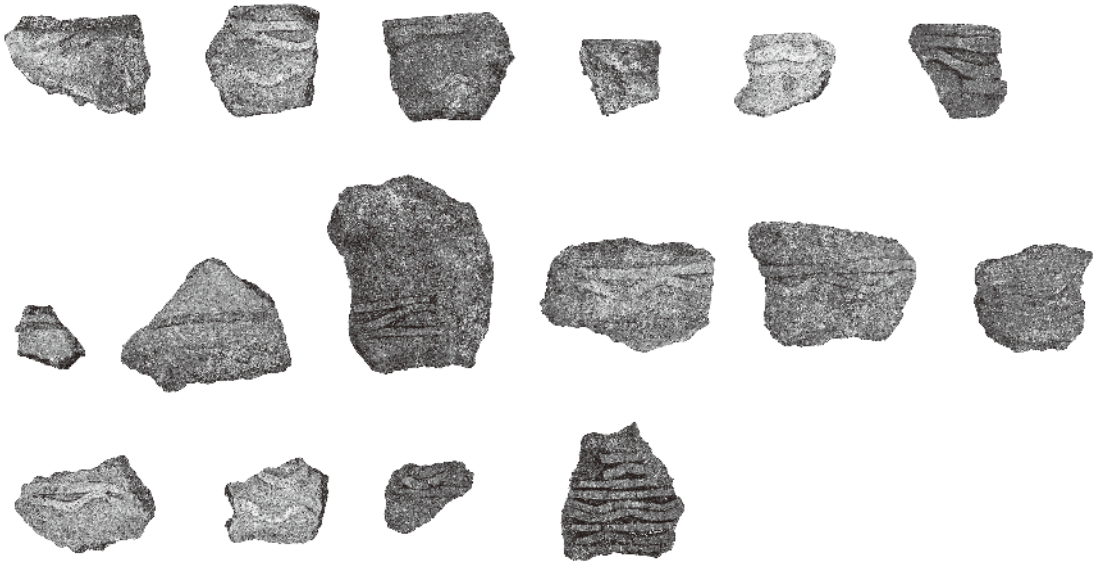
トレンチ２　遺構外（Ⅲ層）出土土器



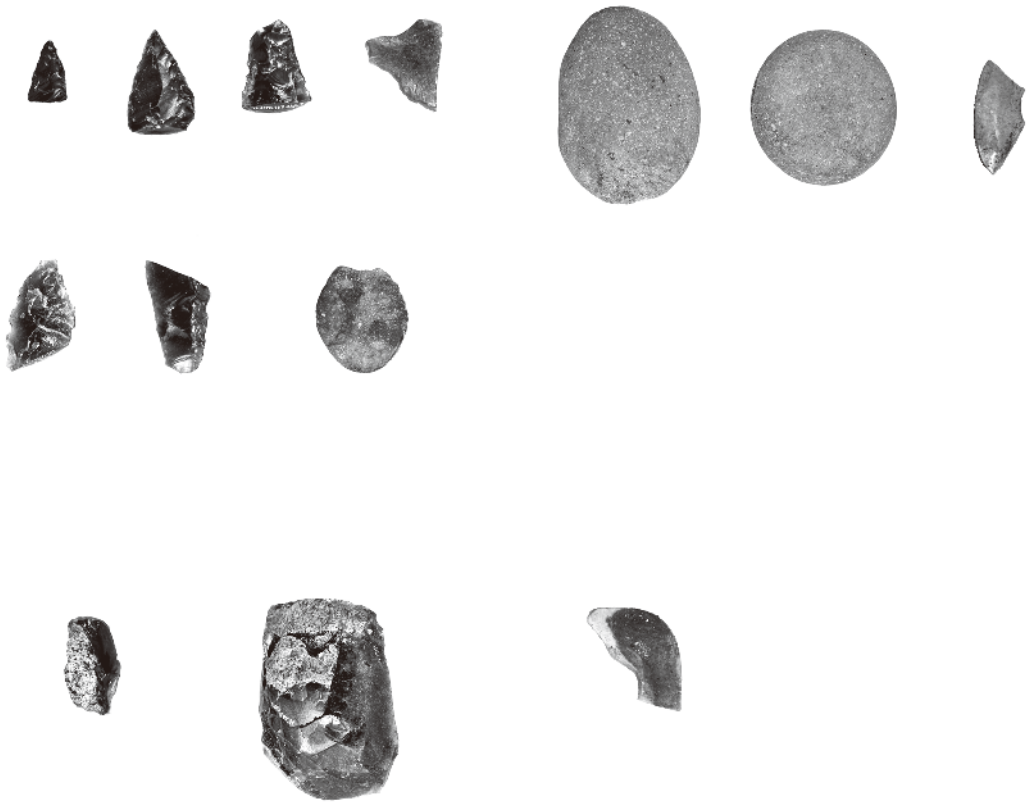
トレンチ２　遺構外（Ⅱ層）出土土器



トレンチ２　遺構外（Ⅰ層）出土土器



トレンチ２　遺構外（表土）出土土器



トレンチ２　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器

トレンチ３　掘削前状況

トレンチ３　完掘状況

トレンチ３　レキ集中出土状況

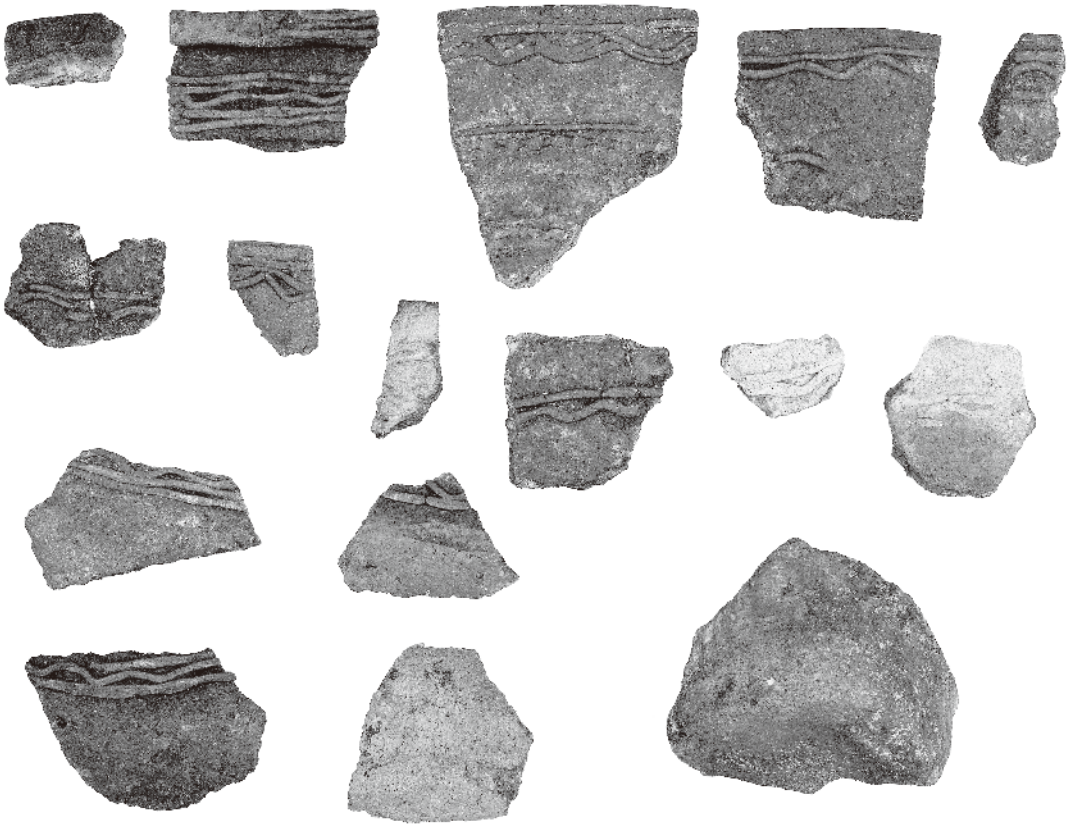
トレンチ３　石器出土状況

トレンチ３　土器出土状況

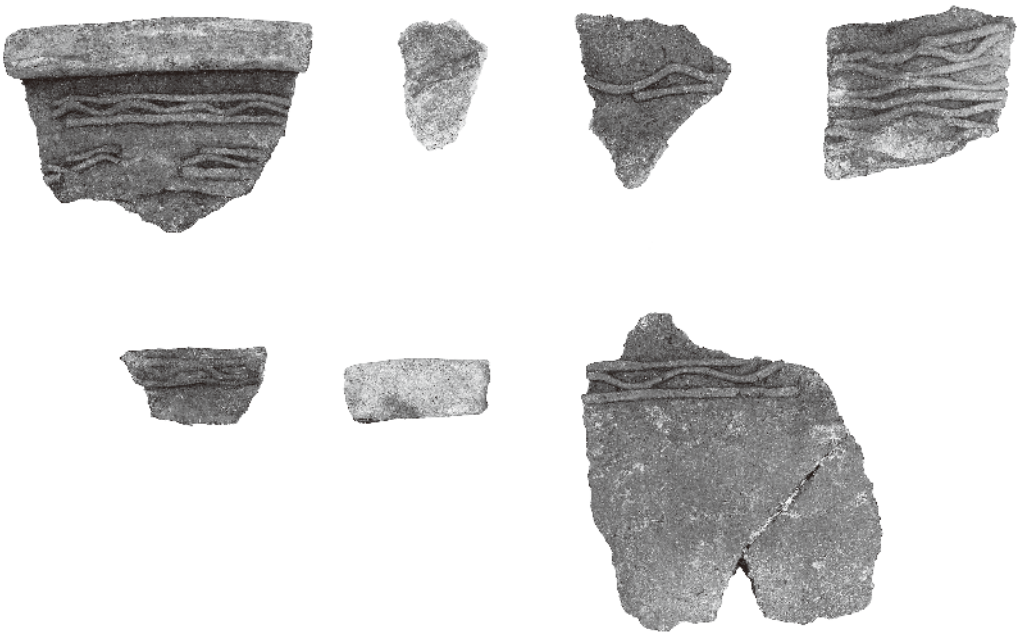
トレンチ３　作業風景（１）

トレンチ３　作業風景（２）

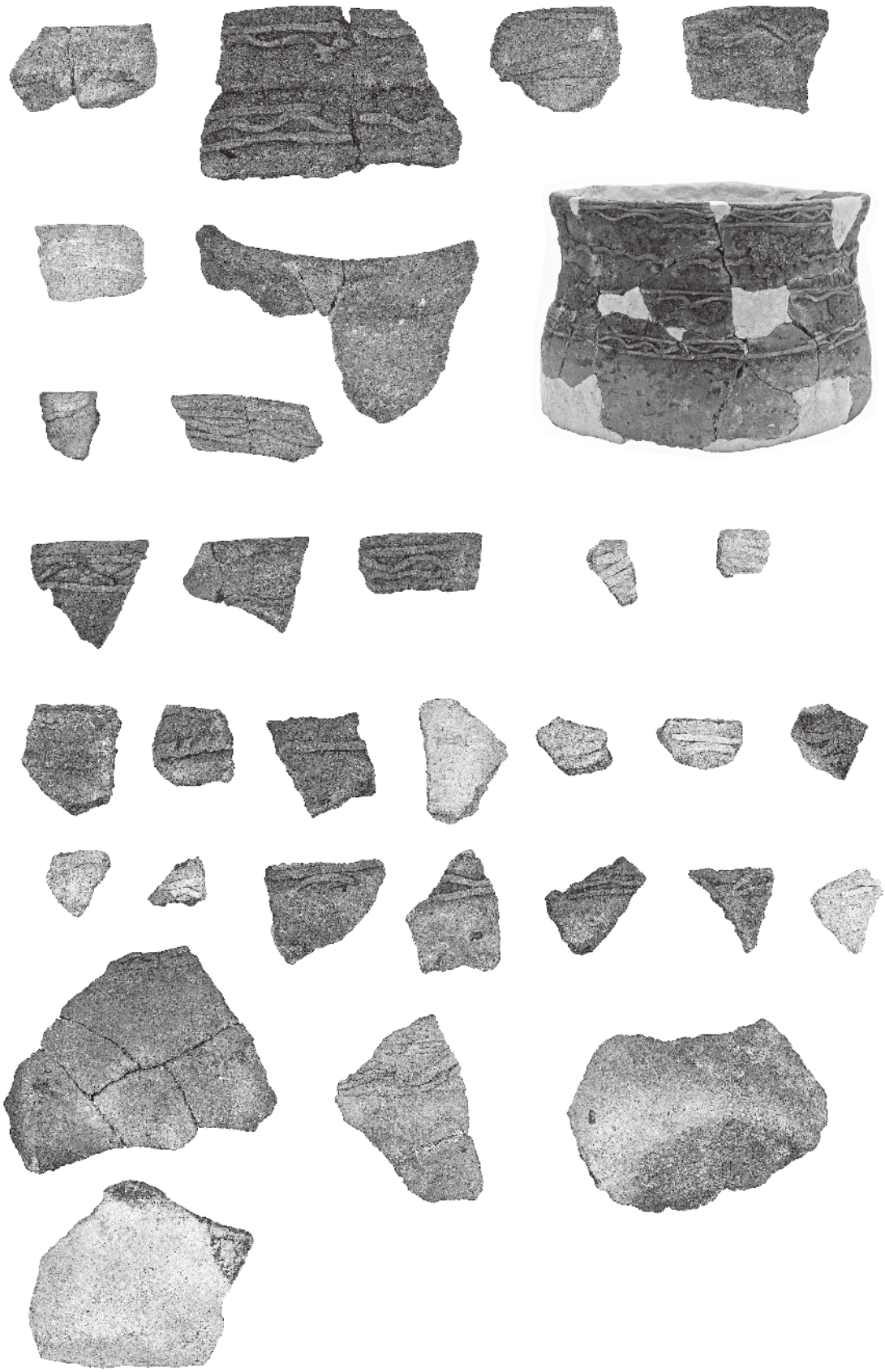
トレンチ３　学芸員実習



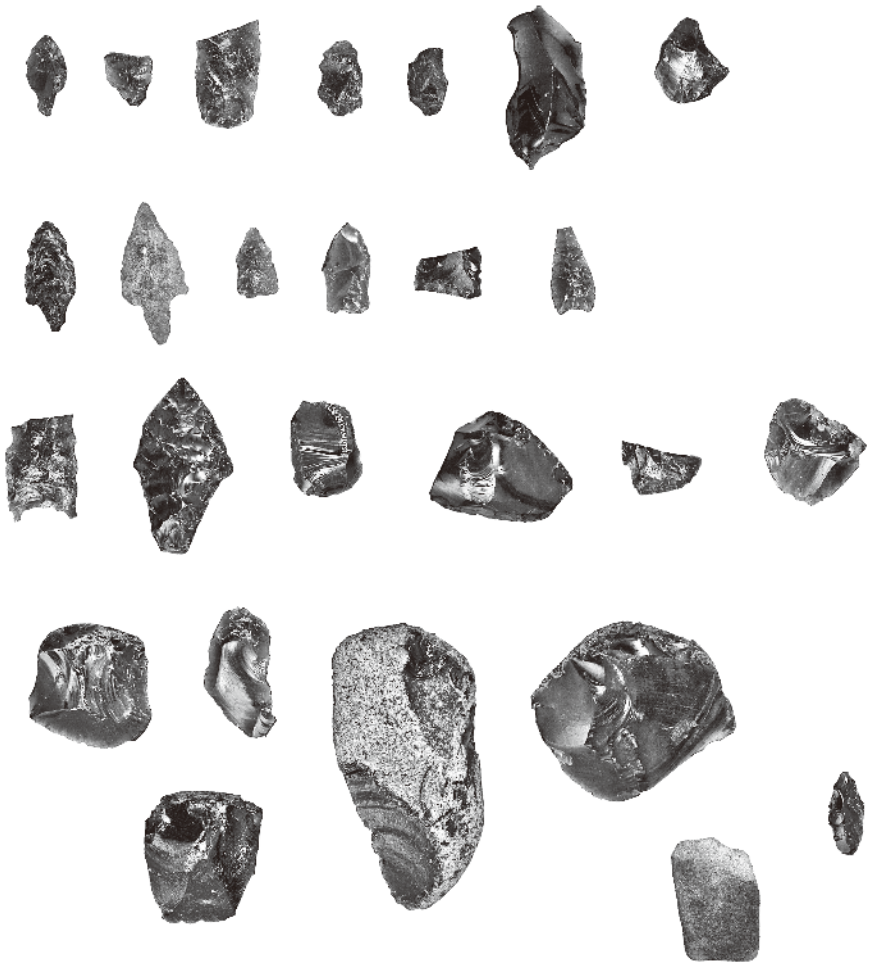
トレンチ３　遺構外（Ⅲ層上部）出土土器



トレンチ３　遺構外（Ⅰ層・表土）出土土器

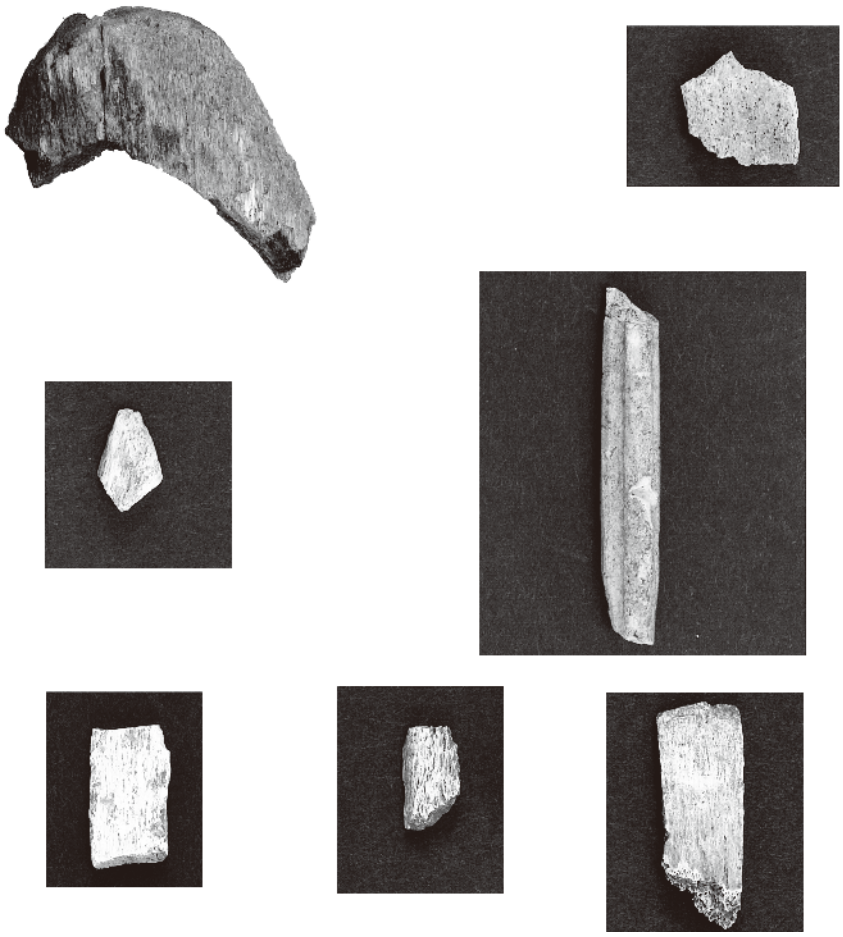


トレンチ３　遺構外（Ⅱ層）出土土器

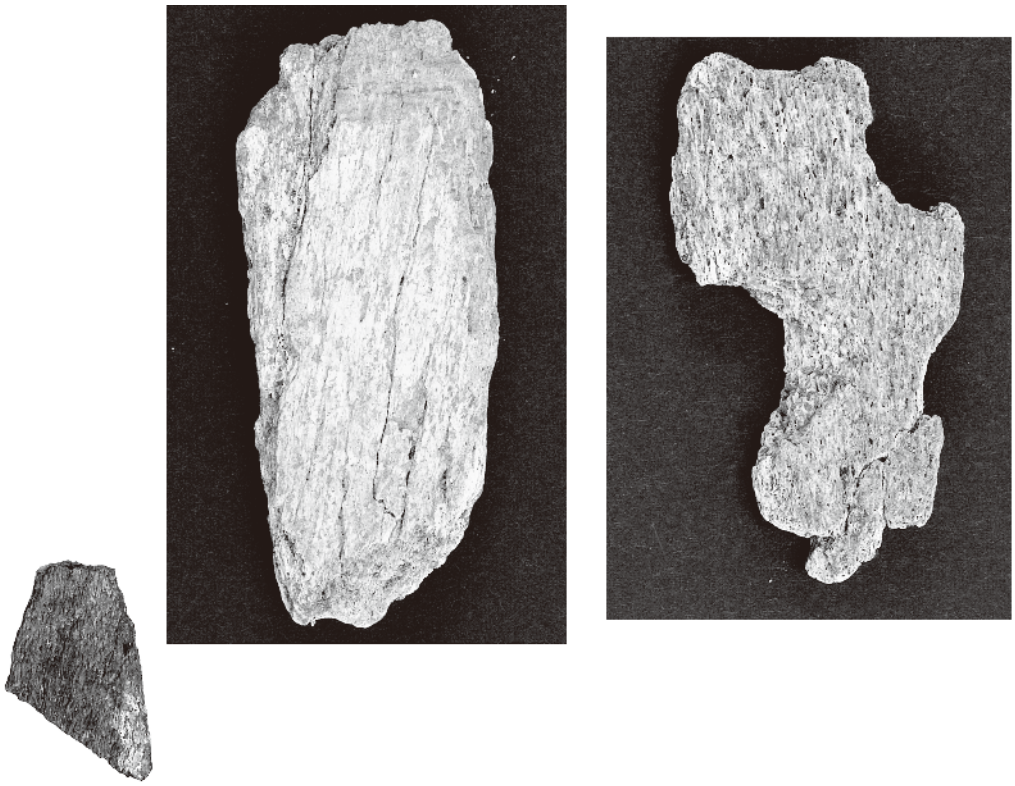


トレンチ３　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層）出土石器

作業風景



トレンチ２　遺構外（Ⅱ層・Ⅰ層・表土）出土骨製品



トレンチ３　遺構外（Ⅲ層・Ⅱ層・表土）出土骨製品

斜里町文化財調査報告XXXⅦ
チャシコツ岬上遺跡
発掘調査報告書

発行日：2014年3月
発行者：斜里町教育委員会
北海道斜里郡斜里町本町12番地
印　刷：有限会社　斜　里　印　刷
北海道斜里郡斜里町本町11番地2